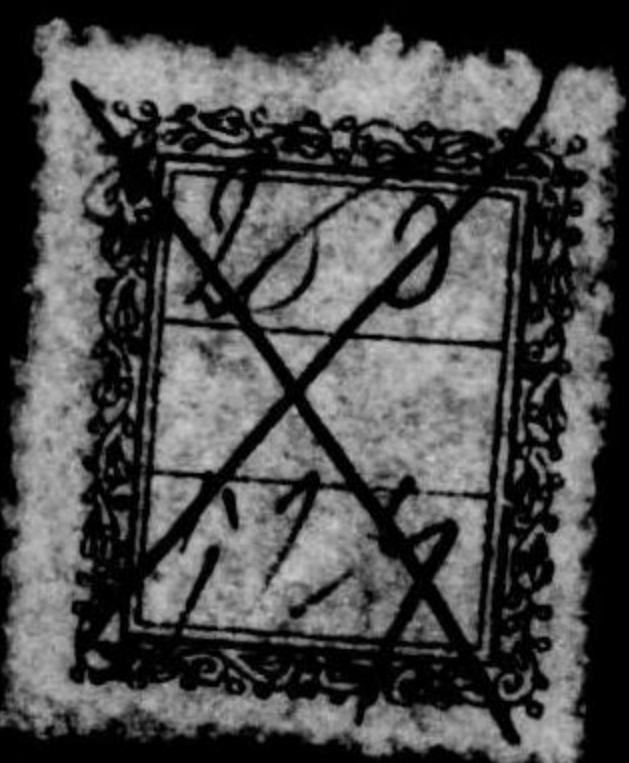


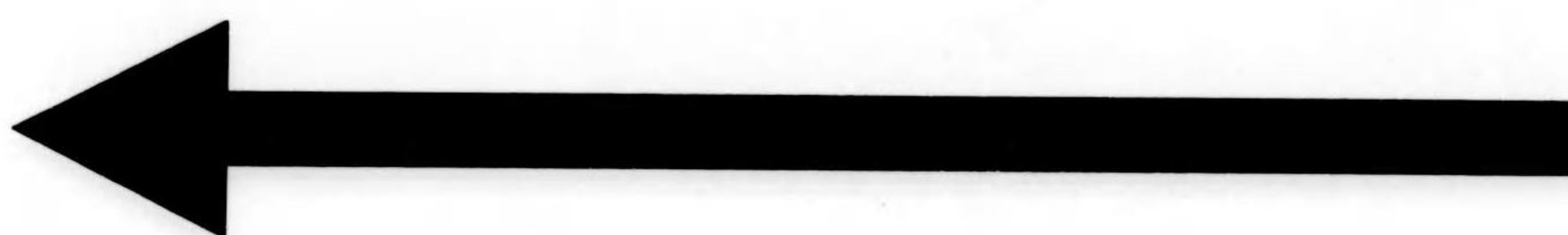
特 104
50



特



始



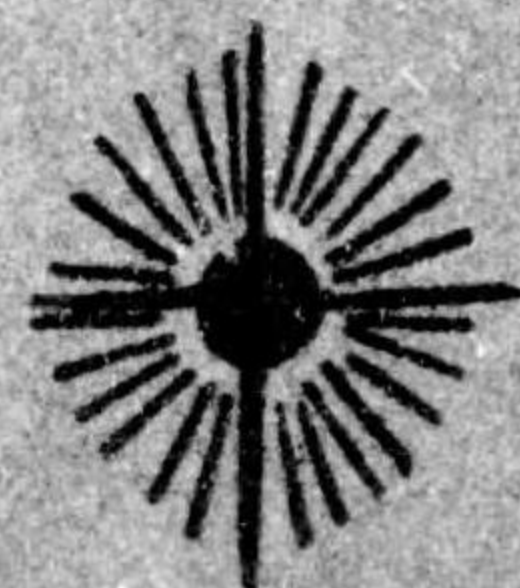
加藤一夫編

一般入叢書

第四編

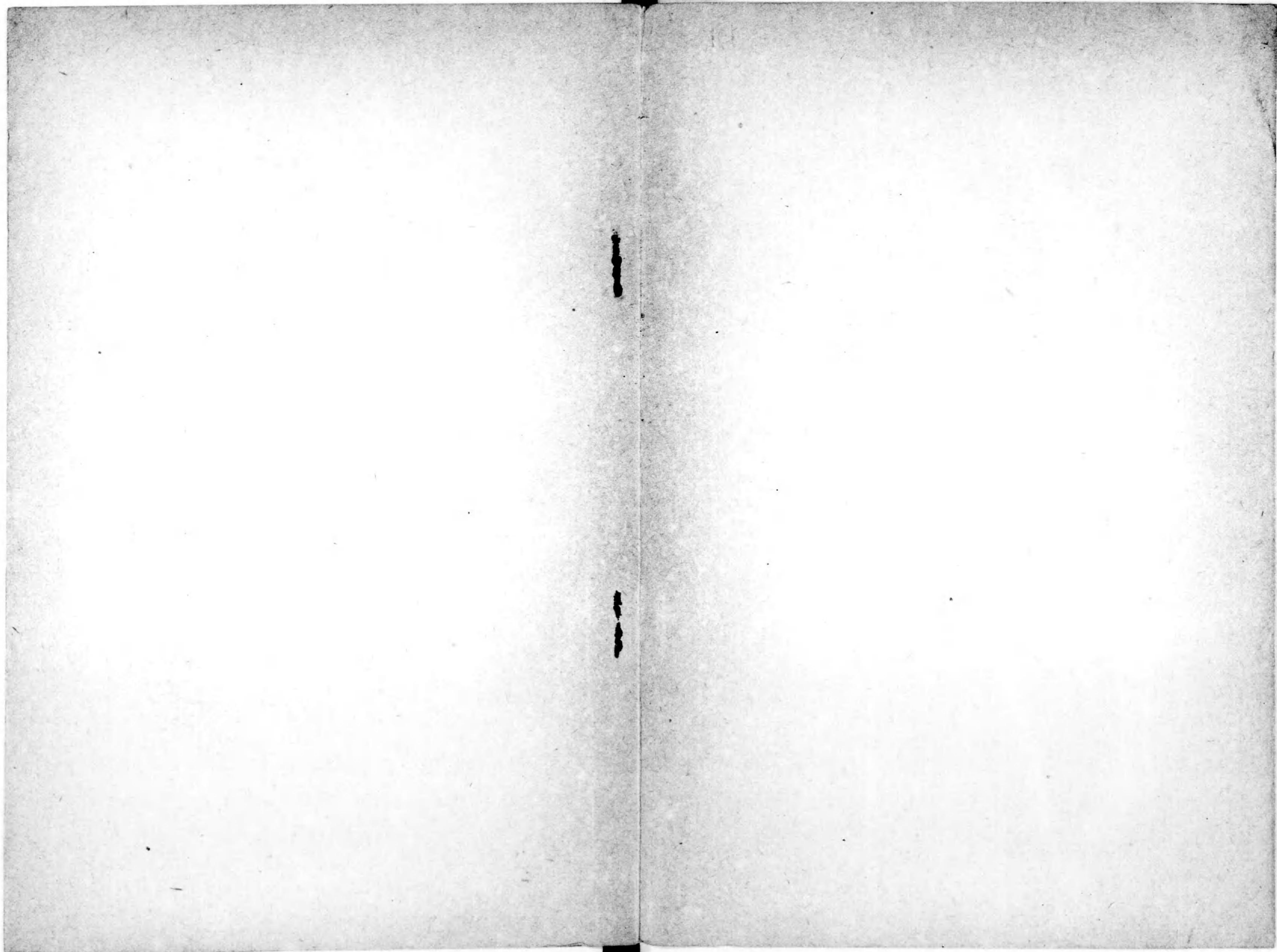
入 侵

トスル



洛陽堂版





特104
50

書叢人般一

編夫一藤加

編四第

葎草、人侵

作イトスルト

譯勝政肥土



版堂陽洛

大正

6. 2. 21

内交

侵入

—義勇兵の話—

七月十二日ロポフ大尉は肩章と軍刀を帯びて——正装で、私の土小屋の低い戸口を入つた。私がコオカサスに到着した以來、私は正装の彼を見たことがなかつた。

「中佐のところから直かに来た、」出會頭のいぶかし氣な私の顔つきに答へて、

彼が言った。『僕等の大隊が明日出發しやうといふのだ』

「何處へだ？」私は訊ねた。

「N——へ。そこへ軍隊が集中することになつてゐる』

「そこから皆實戦に進むのだらうね』

「多分さうだらう』

「どの方面へ？どう考へるね』

「考へはしない。僕が知つてゐるだけ話さうとしてゐるのだ。韃靼人が一人、昨夜將軍から命令を持つて馬で駆けつけたのだ——大隊は二日分の重焼パンを携つて出發すべしといふのだ。だが、何處で、何のために、そして何日間だか、そんなことは、君、僕等は訊ねやしない。僕等は出發の命令を受けてゐるのだ

——それだけで充分だ』

「だが重焼パンが二日分だけといふのなら、軍隊はそれより長くは駐屯してゐやすまら』

「いや、どうして、そんなことで何がわかるものか……」

「どうしてなんだ』私は驚いて訊ねた。

「だつてさ、彼奴等は一週間の重焼パンを携つてダルギへ進軍してさ、一月近くもそこにゐたのだ』

「それで僕は君と一緒に行けないかね？」私は短かい沈黙の後で訊ねた。

「行けるさ、無論。だが僕に言はせれば、行かない方がいゝね。なんだつて危ない眞似をしなけりやならないのだ？」

「いや、君の忠告は無用だ。たゞ實戦を見る機會を有つために全一月といふも

のこゝにゐたのだからね、そして君はそれを逸ヒさせやうとしてゐる」

「行き給へ、それでは。たゞね、こゝに滞在してゐる方がよかアないだらうか、實さい？ 僕等が歸つて来るまでこゝに待つてゐることも出来やうぢやないか、獵に出掛けることも出来やうぢやないか。だが僕達を見給へ——どうならうと分るものは神だけだ。残つてゐられ、ば素晴らしいもんだ」彼がいかにキツバリした調子で言つたので、私は實さい始暫くの間、残つてゐるのが素晴らしいに違ないと思つたほどであつた。私は、併しながら、キツバリと返答した——どんな報酬を貰つても後に残るのは御免だ。

「それで君は實戦で何が見たいのか」大尉はなほ私に納得させやうとして續けた。『もし君がだ、戦争がどんなものか知り度いと思ふなら、ミハイロスキイ、ダニレヴスキイの戦争記を讀み給へ——あれは立派な本だ。あれには細かいと

ころまでよく書いてある——凡ての軍隊がどこに位置を占めて、どんなに戦争が行はれたかといふことまで」

「だがそんなものは僕を喜ばせはしないよ」私が答へた。

「何だといふのだ、それでは。君はまるでどうして人が殺されるのか見たがつてゐるやうだ……千八百三十二年にも、君のやうな、西班牙人だつたと僕は思つてゐるが、男がゐたのだ。其奴は僕等と一緒に二度遠征に出掛けて行つた、青い外套か何でもそんなやうなものを着て……そして其奴は殺された。君はこゝで誰も驚かすことは出来ないよ、君」

私の動機に、大尉がこんないやしいせんたく忖度をしたので、私はムツトしたが、それを正さうとはしなかつた。

「其奴は勇敢な男だつたかね」私は訊ねた。

「どうして僕にそんなことが言へる？其奴はいつも先頭に立つてゐた。射撃の聞こえるところにはどこにも其奴がゐた」

「それでは其奴は勇敢だつたに相違ない」私が言つた。

「いや、用がないところに出しやばつて、それで勇敢だと言はれるものではない」

「何を、それでは、君は勇敢だと言ふね？」

「勇敢？勇敢？」大尉は繰返した、始めてこんな問題に出逢つた人のやうな態度をして、「勇敢な男といふのは、當然さうすべき振舞をする男なのだ」彼は鳥渡考へてから言つた。

私はプラトンの勇氣の定義——人が恐れなければならぬところのもの、人が恐れてはならないところのものに關する知識——を思ひ出した、そして大

尉の定義には表現の漠然と不正確があるに拘らず、私は、兩者の根本の觀念は、想像されるほど相違するものではないといふこと、そして大尉の定義は、實際、希臘哲學者の定義よりも正しいといふことを考へた。それは、若し彼がプラトンのやうに表現することが出来たならば、彼は多分、勇者とはたゞ恐るべきを恐れ、恐るべからざるを恐れない者である、と言ひもしたらうから。

私は大尉に私の考を説明したいと思つた。

「さうだ」と私は言つた。『どんな危険にも撰擇があるやうに僕には思はれる。

そして例へば、義務といふ觀念の影響からなされた撰擇は勇氣と言へる、だが、いやしい感情の影響からなされた撰擇は卑怯といふものだ、だから虚榮とか、好奇心とか、貪慾とかいふものから、命掛けの仕事をするものを、勇敢など、言へるものではない。だが、さうでなくて、家族に對する尊敬すべき義務とい

ふ感情からか、全然良心的な根據から危険に向ふのを拒むものを、卑怯者だなどと言へるものではない』

大尉は、私が話してゐた間、幾分妙な顔つきで私を眺めた。

「さア、僕のその証明は同じぢやないね」彼はバイブを詰めながら言つた、「だが僕等は一人推理の好きな旗手を連れてゐるよ。君は彼と話さなければなるまい。彼は詩も書く』

私はコオカサスで始めて大尉に逢つたのだが、ロシアでは彼のことを可成知つてゐた。彼の母のマリア、イワノヅナ、ロボフは、私の家から一哩半はなれてゐる彼女の僅かな土地の収入で暮してゐた。私はコオカサスに出發する前、彼女に會ひに行つた。老婦人は、私が彼女のバシエンカー——彼女は髪の白い中老の大尉をかう呼んでゐた——に逢ひに行くといふので、そして生きてゐる手紙の

やうに、彼女がどう暮してゐるかを話し、そして家から小包を彼に届けることが出来るといふので、喜んだ。素敵なバイと鹽漬の肉で私を馳走した後で、マリア、イワノヅナは、彼女の寢室のなかへ行つて、そこから黒い絹のリボンが縫ひつけてある多少大きな黒い護身符を取り出して來た。

「これは私達の尊い守り神、九月の祭日のマリア様で御在ます」彼女はかう言つて、十字を切つた、そして聖母の像に接吻して、それからそれを私の手に置いた、「何卒、あなた、それを彼にお渡し下さい。御存知でもありませんが、彼がコオカサスに參りましたとき、私は彼のために御勤めの歌を歌つて貰ひました、そしてもし彼が負傷もせず、生きて居りますなら、私は聖母様であの御像を作つて貰はうとお誓を立てました。ところがマリア様と御聖人さまがたが彼にお慈悲を給はつてから、もう十八年になつて居るので御在ます。彼はまだ一

度も負傷を致しません、それにまア何といふ戦に彼は行つて居つたので御在ませう………彼と一緒に居りましたミハイロが、私に戦の話をしていましたときに、それはもうホントウに、身の毛もよだつ程で御在ました。でも私が何か彼の話を聞きますとすれば、それはもう他人さまからだけで御在ます。彼は、あの子は、決して自分の戦のことは私に一言も書いてよこしませんので御在ます——彼は私を吃驚させると不可ないと思つて居るので御在ます』

大尉が四度非常に負傷したと知つたのは、私がコオカサスへ来てからであつた、そしてそれも大尉からではなかつた。そして殆んど言ふ必要はないのであるが、彼は彼の負傷に就いても戦争に就いて同様彼の母には書いてよこさなかつたのであつた。

『それではこの御像を彼の身につけてやつて下さい』彼女は續けた。『私はそれ

から彼にお祈禱の言葉を送ります。聖母さまがどうぞ彼をお守り下さるやうに！ それをいつも身につけて置きますやうにさせて下さい、殊に戦では。どうぞ彼に母がかう言つてゐると仰有つて下さい』

私はたしかに彼女の言傳を傳へてやると約束した。

『屹度あなたはあのバシエンカがお好きになるでせう』老婦人は言葉を續けた、
『彼は、それは可愛い子なのです！それはもうホントウに、一年だつて彼が金を送つて來ないことは御在ませんのです、そして娘のアヌシユカまでが彼から可成な仕送りをして貰つて居ります………そしてそれはみんな彼の給料からばかり出てゐるので御在ます。ホントウにいつも私はあのやうな悴を私にお與へになつたことを神様に感謝して居るので御在ます』彼女は言葉をきつた、彼女の眼には涙があつた。

「息子さんはよく手紙をお寄込しですか」私は訊ねた。

「いゝえもう。いつでも年に僅か一度きりで御在ます。彼は金を送つて寄込しますとき、一言二言申して寄込します、それも時には何とも申しませんので御在ます。たゞ彼は「お母さん、手紙を上げなければ、生きて丈夫なのだといふことで御在ます。もし何事かおこつたなら、決してそんなことは御在ませんが、皆が私に代つてお母さんに手紙を上げるでせう」とかう申して居るので御在ます」

12

私が大尉に彼の母の贈物——それは私の小屋のなかに在つた——を渡したとき、彼は包紙を一枚欲しいと言つて、それを丁寧に包んで仕舞ひ込んだ。私は彼に彼の母の日常生活の詳しい話をした。大尉は一口も話さなかつた。私が話を止めたとき、彼は顔を背向けて、やゝ長い間隔の方で彼のパイプを詰めてゐ

た。

「さうだ、母は立派な年老だ！」彼は振向きもしないで、少し嘖聲で言つた。

「神はいま一度母に逢ふために私を返すだらうか、疑はしいものだ？」

非常にゆたかな愛情と悲痛がその單純な言葉のうちに見えた。

「何故君はこゝで服務してゐるのだ？」私は訊ねた。

「してゐなければならぬのだ」彼はキツパリと答へた。「現役の二倍の給料が僕のやうな貧乏人には大金なのだ」

13

大尉は慎重に生活した。彼は賭事をしなかつた。稀には酒を飲んだ、そして安い煙草を喫つた。彼はその煙草を何か分らない理由から、刻煙草と呼ばないで Sambrotalik と呼び慣はしてゐた。私は初めから大尉を好んだ。彼はよくある溫和しい真正直なロシア風の顔をしてゐた、その眼に見入るのを愉快で容易いも

のと誰も知るやうになる、併しこの會話の後、私は彼に純真な尊敬を感じた。

二

翌朝四時に大尉は私を連れに來た。彼は肩章のない擦れた古い上衣を着て、太いコオカサス風のズボンを着いて、みすばらしい黄がかつた羊毛のついてゐる白いアストラカン皮の帽子を被つてゐた、そして彼の肩には劣等に見える亞細亞式の軍刀を吊つてゐた。彼の乗つてゐた白いコオカサス産の小馬は、頭を垂れて、細かな跑足で歩みながら、絶えずその毛の少ない尾を振つた。善良な大尉の様子には勇敢な點も、立派な風采も無かつたが、それは、吾知らず尊敬せずにはゐられないほど彼の周圍に對する公平を示した。

私は彼を一分も待たせないうで、すぐ私の馬に乗つた、そして私達は一緒に要塞の門を乗り出した。

大隊は既に六百碼も先に、眞黒な、稠密な、重い塊のやうに見えた。私達にはたい、彼等の銃劍が長い針のギツシリした塊のやうに見えたので、彼等が歩兵であることが分つた。そして時々私達は、兵卒達の歌、太鼓、及び私が要塞内で一度ならず喜んで聞いたことのあつた第六中隊の第一歌手の澄んだ中音の聲を、一しきり聞いた。道は深い廣い隘路の中央を、小さな流の堤に沿ふて走り下つた。流はその時「活動して」ゐた、といふのは、流がその堤に溢れてゐた。山鳩の群がそのあたりに舞つてゐた、石の多い堤に下り、それから中空に飛廻はり、そして速かな圓を描いて視界から飛び去り乍ら。太陽はまだ見えなかつた、たゞ右手の絶壁の頂上が日光の斑點を示し始めた。灰白色の岩石、黄綠色の蘚

苔、拘杞と水木と矮小な楡の深い叢林が、日出の清澄な黄金色の光のなかに際立つて鋭く浮出た。併し隘路の窪い向側は、煙のやうにもくくくと捲き上つて立ち零めた濃霧で、冷たく暗くなつてゐた、そしてそのなかにボンヤリ、薄紫、黒、濃緑、白と變化してゆく色の不斷の混淆が見られた。私達の眞直ぐ前には地平線の濃紺色に對して、雪に覆はれた眩ゆい眞白な山が驚くほど透明に聳えて、山の異様な影と輪廓が最も微細な點まで優美に輝いた。蝨と蟋蟀と幾千の他の蟲が背高い草のなかに眼醒めて、鋭い不斷の鳴聲で空気を充たしてゐた。小さな鈴の無限な集團が恰度人々の耳のなかで鳴つてゐるやうに見えた。空気は、水と草と霧の香にほひに、實際美しい夏の朝の香に、充ちくくしてゐた。

大尉はマツチを擦つてパイプを點ともした。Sambrotalik 煙草の香にほひと引火奴ほくちの香にほひが、私には非常に氣持よく感じられた。

私達はおつと早く歩兵に追ひつたために道傍を進んだ。大尉はいつもより沈んでゐるやうに見えた。彼は口からダゲスタンパイプを離さなかつた、そして一碼毎に拍車を入れて、濕つた長い草のなかに僅に見える濃緑色の痕跡あとを残して左右に揺れてゐる彼の小馬を勵ました。一羽の年老つた雄の雉子が、小馬のすぐ脚もとから、獵師の心臓を波打たせるゴブくいふ叫と翼音を立て、飛び立つた、そして除しづかに空中に舞ひ上つた。大尉はそれには少しも氣づかなかつた。

私達が殆んど大隊に追ひつかうとしてゐたそのとき、私達の後を跑かけてくる馬の蹄の音を聞いた、そして同時に、士官の制服を着て高い白いアストラカン皮の帽子を被つた一人の非常に愛らしい子供のやうな青年が、馬で跑かけついた。彼は私達の傍を通りながら、微笑し、頭を下げ、そして彼の鞭を振つた………

私は、たゞ彼が馬に跨つて、或る獨特な美しさで手綱を執つてゐたこと、そして彼が奇麗な黒瞳勝ちな眼と、形のいゝ鼻と、そしていかにも薄い僅かな口鬚を有つてゐたことを、氣づくことが出来たに過ぎなかつた。私達が彼を褒めてゐたのを知つたとき、彼がどうしても微笑せずにはゐられなかつたのが、私には殊に氣に入つた。あの微笑からして、彼が非常に若いことが確であつた。

「それで何で彼は跑けて行くのだらう？」大尉は唇からパイプも放さずに、困つた様子でつぶやいた。

「誰だ、あれは？」私は彼に訊ねた。

「旗手のアラニンだ、僕の中隊の副官の……士官學校から來て未だ一月にしかならないのだ」

「始めて實戦に行かうとしてゐるのだらうね？」私は言つた。

「それで以て大喜びなわけなのだ」大尉は深重な態度で頭を振りながら答へた。

「あゝ、青年のことだ！」

「さあ、どうして彼が喜ばずにゐられやう。僕には分る、青年士官にとって實戦に臨むといふことは非常に興味かもしろいことに違ないのだ」

大尉は二分間口を利かなかつた。

「僕が言はうとすることも恰度それだ。青年のことだ」彼は低聲で言葉を續けた。「實戦がどんなものかを知る前にどんな喜があるといふのだ。能く實戦に行くとき、それを喜ばなくなるものだ。僕達がまア行軍中二十人の士官を有つてゐるとして見給へ。中には殺される奴も、負傷けがをする奴もあるだらう、それは確だ。今日は僕の番だ、明日は彼の番だ、そしてその翌日がまた誰かの番だ。それなのに何が嬉しいことがあるのだ？」

赫々した太陽が山の後から上つて、私達の行軍してゐた隘路を照し始めるや、大浪のやうな霧の雲は散つて、日は暖かくなつた。銃を背負ひ背囊を背負ふ兵士が、塵埃道を徐かに歩いた。時々私は小ロシア語の談話と笑聲を、隊伍のなかゝら途切れ〜に聞いた。白い麻布の上衣を着た少數の老兵は——大抵軍曹か伍長だが——煙草を喫ひ、沈んだ調子で談しながら道傍を進んだ。三頭の馬に引かれて推高く荷物を積んだ輜重車輛が、塵埃の厚い不動な雲を攪き立てながら、並足で一步步々進んだ。士官達は先に馬で行つた。彼等の或者は、彼等がコオカサスで所謂見榮をしてゐた——彼等は四回ほど躍進させるまで馬を鞭

つて、それから馬の頭を一方にしてはげしく馬を止めてゐた。他の士官達は歌手に聞き入つてゐた、窒息するやうな熱氣にも拘らず歌手達は次から次と倦まずに歌ひ續けた。歩兵の前方約三百碼のところ、韃靼人の騎兵で取り巻かれ、大きな白馬に跨つて、一人の士官が進んだ。無茶な大膽と、誰に向つても眞實を打ち開ける男であるのとで、彼は聯隊内で有名な士官であつた。彼は縁に縫箔のしてある黒い上衣と、對の新しい立派な縫箔のしてあるツボンと、亞細亞風に身につけて、ピッタリと合つた靴を穿いて、黄色いサアカシヤの外套を着て、高いアストラカン皮の帽子をあみだに被つてゐた背の高い立派な男であつた。彼は胸と背に銀の縫箔の皮帯を締めて、その前部には角製の火薬入れが、後部には一挺のピストルが挿し込んであつた。いま一挺のピストルと銀色の鞘の短剣が彼の腰帯に吊されてゐた。凡てかういふものゝ上に、彼は縫箔で縁を

とつた赤いモロッコ皮の鞘の軍刀を佩いてゐた、そして彼の肩には、黒い袋に入れた小銃が吊るされてゐた。彼の服装、彼の乗馬姿、彼の態度、そして彼の凡ての動作は、彼が韃靼人のやうな様子をしやうとしてゐることを示した。彼は一緒に馬を驅つてゐる韃靼人に、私の知らなかつた言葉で話した。併し後者が相互に示し合はす當惑氣な皮肉な顔つきから、私は彼等がいづれも彼の言葉を解しないのだと想像した。この士官は若い中尉で、マルリンスキイやレルモントフを手本にしてゐる所謂勇者の一人であつた。此等の人々は、ムラア、ヌル等といふ「現代の英雄」のプリズムを通しての他、コオカアサスを見ることが出来ない。そして彼等の凡ての身振は、彼等自身の趣味によつてはなく、此等の手本の例によつて導かれてゐる。

例へば、この中尉も多分貴婦人や勢力ある人々——將官、佐官、副官——の

社會が好きであつたのであらう、また實際彼は素晴らしい派手好きからこんな社會が非常に好きであつたに違ない、と私は思ふ。併し彼は、彼の粗放な方面を凡ての有力な人々に示すことを彼の退引ならない義務と考へた、それでも彼の粗放は畢意するに餘り大したものではなかつた。そしていつも貴婦人が要塞に姿を現はした時は、彼は飲み仲間と一緒に、赤いシャツを着て、素足にはスリッパの他他もつけないで、そして出来るだけ大聲で怒鳴つたり、悪口を言つたりして、彼女の窓の側を通らずにはゐられない氣がした。併しこんなことはみんな彼女をムツとさせやうといふよりはむしろ、なんと素晴らしい白い脛を彼が有つてゐて、彼がさうしたいと思ふなら、どんなに容易に彼と戀に陥ることが出来るかを、彼女に示さうとする願からであつた。

よく彼は二三人の温和しい韃靼人と、路傍に待ち伏せして、偶然通りかゝる

敵愾心のある韃靼人に不意打を喰はして、打殺すために、夜分山地の方へ出掛けた。そして彼は心の中でこんなことをしても餘り大膽なことでもない一度ならず感じてはゐたが、彼は、何かの理由から人々に失望し、従つて彼等を嫌悪し侮蔑してゐる風をしたゝめに、是非彼等を苦しめなければならぬと感じた。二つのものを彼は決して彼の身から離さなかつた——寢床に行つた時も彼の頸に掛けてゐる大きな聖像と、彼のシャツにつけてゐた短剣と。彼は堅く敵を有つてゐると信じた。彼は誰かに向つて復讐して、血を以て或る侮蔑を拭ひ去らなければならぬ、と信ずることが、彼の最大の喜びであつた。人類に對する嫌厭と、復讐と、侮蔑の感情が最も高く最も詩的な情緒であると彼は確信した。併し私がおの後ふとしたことから知合になつた、勿論サアカシア人である彼の情婦の言葉によると、彼は最も親切な最も温和しい男であつた。そして

毎晩その陰鬱な感想を認めて後、彼は罫紙に彼の清算をして、拜跪ひざまづいて祈禱をした。そして彼が受けた凡ての苦痛が、全く彼が求めたものと見えるとは！それは彼の仲間と兵卒達は、彼が彼等に求めたやうに彼を理解することが出来なかつたからであつた。彼の仲間と一緒に彼の夜の遠征の一つで、彼は敵愾心のある同じ部族の一人の足を、彈丸で傷つけて、捕虜にしたことがあつた。この男は此後中尉の屯營で七週間暮した。そして中尉は其の男が彼の最愛の友で、ともあるやうに彼を世話し看護した、そして彼の負傷が治つたとき澤山の贈物をやつて歸らした。その後、彼の遠征の一つで、中尉が敵を防ぐため斥候線に退いて發砲してゐたとき、彼は彼等の間で一人が彼の名を呼ぶのを聞いた。そして彼の傷を受けた客が進み出て、合圖で中尉を招いた。中尉は彼の訪問者に會ひに進み出て、彼と握手した。山人達は彼等の距離を保つて、彼に發砲しな

かつた。併し中尉が馬を廻すや、數人が彼に發砲した、そして一弾は彼の腰の後部を擦過した。

いま一つの事件は私が目撃した。或る晚要塞内に火災があつた、そして中隊の兵士が消火に従事した。突然眞黒な馬に跨つた背の高い人影が、眞赤な火焰に照らされて、群集の眞中に現れた。人影は群集を押し分けて、火のところまで眞直に馬を驅つた。恰度火まで進んで、中尉は彼の馬を飛下りて、一側が焰になつてゐる家に走り込んだ。五分後に、彼は頭髪を焦がし、肘に火傷をして出て來た、上衣のなかには火のなかから救出した二羽の鴿を抱いて。

彼の名はロオゼンクランツであつた。併し彼はどうにかしてヴレンジアン家から出てゐる彼の系統をたどりながら、能く彼の祖先のことを話した、そして誤なく彼と彼の父達が、最も純粹なロシアの家柄であることを證した。

四

太陽は既に頂上を過ぎ、灼けた空氣を通して、熾熱な光線を炎天の地上に投げてゐた。紺青の空は隅なく澄んでゐた。たゞ雪の山の麓に薄紫の雲が集りかけてゐた。静かな空氣は一種の透明な塵埃に充ち／＼てゐるやうに見えた。日は既に堪え難く熱くなつてゐた。私達が半途來た時に、私達は小さな流に達した、軍隊はそこで停止した。兵士達は彼等の小銃を交叉して、流へ突進した。

大隊の指揮官は日蔭の太鼓の上に腰を下ろした。そして彼の階級の全威嚴を彼の顔の凡ての點に見せながら、彼の士官達と共に食事をとるために居住ひをなほした。大尉は中隊の輜重車輛の下の草に横になつた。派手者なロオゼンクラ

ンツ中尉と少数の他の青年士官は、ひろげた外套のうえに蹲つて、酒宴の準備をしてゐた。それは彼等の周圍に並んでゐる酒壇と細口壇と、そして歌手達の異様な興奮で知れた、彼等のうしろに半圓形をして立ちながら歌手達はレスギンカの曲に合わせてコオカサスの舞踊唄を奏したり、口笛で吹いたりした——

「シヤミルが謀叛を企てた、

過ぎ去つた年に、

Tiri, ra-ta-ti

過ぎ去つた年に」

此等の士官の間には、朝、私達に追ひついた若い旗手がゐた。彼は非常に面白さうであつた。彼の眼は輝き、彼の舌は時々鳥渡もつれた。彼は凡ての人に接吻し、そしてどんなに彼が彼等を愛してゐるかを彼等みんなに知らせ度いと

願つてゐた……可哀想に！彼はまだそんな感情を抱くのが馬鹿らしく見えることも、彼が凡ての人にそれで懇親ちかづきになつた彼の淡泊と深情が、彼があんなに願つてゐる愛情を彼に與へる代りに他の人々をして彼を嘲笑せしめることも、彼はまだ知らなかつた。それに彼は、彼が外套の上に身を投げて、彼の腕に寄りながら、濃い黒い頭髪を撫で返したとき、彼が非常に美しくあつたことも知らなかつた。

二人の士官が、樽をカルタ卓にして「馬鹿者」をやりながら、一臺の輜重車の下に坐つてゐた。

私は好奇心を以て兵卒と士官の話に聞き入つた、そして氣をつけて彼等の顔の表情を凝視めた。併し顔のたゞ一つにも、いま私が感じてゐた不安の痕跡あとを見つけることは出来なかつた。冗談、笑聲、噂——凡てが彼等の前にある危険

に對して平氣と無頓着を現はした。彼等の或る者は、あの道を返るべき運命を有つてゐないと、誰も思ふことが出来もしないやうであつた。

五

夕方七時に、塵埃だらけになつて疲勞れて、私達はN——要塞の城門を入つた。太陽は沈みかけてゐた、そして要塞の繪のやうな砲壘と背の高いポブラの一面に植えてあるその庭に、鋤の入つた黄色い畑に、そして模造品でゝもあるやうに雪の山の周圍に押合つて美しい異様な鎖をなした白い雲に、淡紅色の斜な光を投げてゐた。新らしい三日月が地平線上に透明な雲のやうに見えた。要塞に近い韃靼人の村で、一人の韃靼人が小屋の屋根の上で凡ての信徒達を祈禱

に呼んでゐた。私達の歌手は、新らしい精力と生氣を以て、また歌ひ出した。

暫らく休息して身すまゐをととのへて後、私は將軍に私の意向を告げて貰ふために、私の知己の副官に逢ひに出掛けた。私が留まつてゐたその町の場末の場所からの途中で、私はN——要塞で見出さうと豫期してゐなかつた光景に出逢つた。一臺の立派な二人乗四輪馬車が私に追ひついた、中には流行のポネツトが見え、佛蘭西語の喋舌が聞こえた。司令官の邸宅の開いた窓から、恐ろしく調子外れなピアノで奏かれてゐる「リザンカ」か「カテンカ」ボルカの曲が流れた。私が通り過ぎた居酒屋のなかでは、數人の屬僚が手に煙草を挟んで麥酒を飲みながら腰掛けてゐるのを私は見た、そして彼等の一人が一人の者に向つて言ふのを私は洩れ聞いた——『失禮ながら……政治のことにかけては、マリア・グリゴリエヴナが立役だ』背の曲つた病身な顔つきの、みすばらしい外

套を着た一人の猶太人が、キイ／＼音のする破損れた筒琴を、歩きながら奏いてゐた。そして場末中がルシアの終曲で反響してゐた。二人の女が裳にサラサラと音を立て、彼等の頭には絹の頭布をかけ、派手な色の洋傘を手に持つて、私の傍の木造の歩道を急いで過ぎた。屋根の勾配の低い小さな家の前に、二人の女の子が、一人は淡紅色の衣服を着て、一人は青い衣服を着て、頭に何も被らずに、明かに通り過ぎる士官達の注意を引かうと思つて、執念い氣障な唸み笑ひをしながら、立つてゐた。新しい上衣と、白い手袋と、そして眩い肩章の士官達が、街道と並木路を氣取つて歩いた。

私は將軍の家の二階下で私の知合を見出した。私がたゞ私の希望を述べ、彼が容易に許されるであらうと返答したかと思ふと、先刻私が入口で見た立派な馬車が私達の坐つてゐた窓の傍を通つた。少佐の肩章のある歩兵服を着た背の

高い體格のいゝ男が馬車から出て、將軍の家の方へ行つた。

「あゝ、鳥渡失敬する」副官は言つて立上つた。「將軍に話しに行かなければならないから」

「誰が來たのだ？」私は訊ねた。

「伯爵婦人」彼は答へた、そして制服のボタンを掛けて、彼は二階へ馳け上つた。

數分後に、肩章のない上衣を着た背の低い、非常に立派な男が、ボタンの穴に白色の十字架をつけて、階段のところに出て來た。彼の後から少佐と副官と二人の他の士官が來た。彼の馬車に、彼の聲に、彼の凡ての動作に、將軍が彼自身の大きな勢力を充分知つてゐることが現はれてゐた。

“Bon soir, madame la comtesse,” 彼はかう言つて、馬車の窓に彼の手をさし

入れた。

小山羊の手袋をした手が彼の手を握り締めた、そして黄色いボネットの下の愛らしい小さな笑顔が馬車の窓に現はれた。

數分續いたその會話のうちで、私は將軍が笑ひながら佛蘭西語で言ふのをただ鳥渡聞いた——

“ Vous savez que j'ai fait voeu de combattre les infidèles, prenez donc garde de le devenir. ” 馬車のなかで笑聲がおこつた。

“ Adieu, donc, cher général. ”

“ Non, a revoir. ” 階段を登りながら將軍が言つた。“ n'oubliez pas que je m'invite pour la soirée de demain. ”

馬車は動き去つた。

「こゝにもまた一人ある」家へ歸りながら私は考へた、「露西亞人が望んでゐる凡てのものを有つてゐる、地位と富と名聲と——そしていつ終るか分らない戰爭の前夜に、この男は、恰度舞踏會で女に逢ひでもするやうに、可愛らしい女と冗談を言つたり、翌日一緒にお茶を吞まうと約束したりしてゐるのだ！」

私は副官の室でなほ一層私を驚かした男に出逢つた。彼はK聯隊の中尉で、殆んど女のやうに内氣な温和なごな青年であつた。彼は、次の戦闘に、彼が命令を受けるのを妨げやうと計つてゐるのであると彼が言つてゐた人々に對する彼の憤激を洩らしに、副官のところへ來たのであつた。そんな風に振舞ふのは堪らないといふこと、友達として恥づべき行爲だといふこと、忘れることが出来ないといふこと、などを彼は言つた。専心私は彼の顔の表情を凝視め、彼の聲の響に聞き入るにつれ、私は、彼が眞面目であること、サアカシア人に發砲して彼

等の砲火に身を曝すのを許されなかつたのに深く氣を腐らし失望してゐることを、どうしても信じないわけには行かなかつた。彼は不當なことで鞭を受けた子供のやうにむづかつてゐた……私にはそれをスツカリはどうしても理解することが出来なかつた。

六

軍隊は夜十時に出發する筈であつた。八時半に、私は馬に乗つて將軍の家まで行つた。併し私は彼も副官も用事が有るだらうと思つたので、通りで待つた。馬を墻に繋いで將軍が馬で出て来るや彼に追ひつかうと思つて、私は城壁の出張つたところに腰掛けた。

太陽の熱氣と光輝は既に夜の冷氣と新月の微かな光にかはつてゐた、星空の

紺碧のなかには三日月が蒼白い半圓形の光となつて沈み始めてゐた。燈火は既に家の窓と、土小屋の百葉扉の罅隙から輝き始めた。庭園の美しい白揚は、草葺屋根に月光のあたつてゐる白塗りの小屋に對して、地平線の上に前よりも更に高く更に黒く聳えて見えた。家屋と樹木と墻壁の長い影が光つてゐる明るい塵埃道の上に繪のやうに横はつた……川傍には蛙が絶えずガヤ／＼鳴きつゞけた。街衢には、急いでゆく足音と、話聲と、馬の蹄の音が聞かれた。塲末から筒琴の響が、始めは「風は吹く」を、次には何か「オ、ロラ・ウォルツ」を、漂はした。

私は私の默想を記したくはない。それは第一に、私の周圍に陽氣と快活の他何も見えないのに、私の心に頻りに浮び漂ふ陰鬱な心象を私は告白するのを恥ぢなければならぬからである。そして第二に、その心象は私の物語に關係が

ないからである。私はそれほど私の黙想到に専心になつてゐたので、鐘が十一時を打つたのも、將軍と彼の幕僚が私の傍を馬で通つたのも、少しも氣づかなかつた。後衛は既に要塞の門にかゝつてゐた。私は、大砲と彈藥車と輜重車と、そして大聲で指圖を叫んでゐる士官達の雜踏のなかを、やうやく橋を越えた。

私が門から馬で出たとき、私は闇のなかを殆んど一露里も^{ヴェレスト}伸びて無言で動いて行く軍隊を、速足で追つた。そして將軍に追ひついた。一つの長い線になつて續いてゐる重砲兵と乗馬者よりも高く、大砲と士官と兵卒よりも高く、徐かな嚴かな諧調を破る不協音のやうに、獨乙なまりの聲が叫んだ――

「おーい！俺に火繩桿を持つて來い！」そして一人の兵士が大急ぎで呼ぶ、「シエグチェンコー！中尉殿が火が欲しいと言つてられるんだぞ！」

空の大部分が長い濃灰色の雲で覆はれた。雲の間を星が此處彼處にボンヤリ

輝いた。月は既に右手に見える黒い山の近い空際のうしろに沈んだ。そして微かに震えてゐる微光をその峯の上に注いで、麓をつゝんでゐる眞闇と鋭い對照をなした。空氣は暖かく、一枚の草の葉、雲一つ、動かないやうに見えたほど静かであつた。夜は、全く手近のものさへ區別出來ないほど暗かつた。道の兩側に、私は、岩石と、獸と、妙な人影が見えるやうな氣がした。そして私は、それ等の葉擦れの音を聞き、置いてゐた冷たい露に觸れたとき、たゞそれ等が叢林であつたことを知つた。私の前に、少し動いてゐるところのあるもくもく堅まつてゐる眞黒な塊を見た。それは騎兵の前衛で、そこに將軍と彼の幕僚がゐた。同じ黒い塊が私達の中央に動いてゐた、併しそれは前者よりも背が低かつた。それは歩兵であつた。神秘的魅力に充ちた夜の凡ての錯雜した響がハッキリ聞かれるほど、完全な沈黙が全枝隊を傾してゐた。或時は絶望の嘆きのやうな、

或時は笑聲のやうな、豹の遠い悲しい咆聲、蟋蟀と蛙と鶉の甲高い單調な鳴聲、何から生ずるとも私には分らなかつたボンヤリと近づいてくるざはめき、そして説明し定めることの出来ない凡てそれ等の微かに聞こえてくる自然の夜の移動は、私達が夜の沈黙と呼ぶ完全な旋律的な響に混淆した。馬の蹄の鈍い響と、徐かに動いてゐる枝隊の下になる高い草のそよぎとで、といふよりは其等の音に交つて、その沈黙は破られた。

たゞ時々重砲の輾りと、銃劔の鳴る音と、低聲の話か馬の鼻息が、隊伍のうちに聞こえた。

全自然は平和を與へる力と美に充ちてゐるやうに見えた。

この無限な星空の下に、この美しい世界に、人々が平和に生きる充分な餘地は無いのか？何故この恍惚たる自然のなかで、憤怒と復讐と、そして仲間を殺

さうとする慾望が人の心靈のうちに存在することが出来るのか？人の心裡の凡ての邪惡は自然との接觸で消えもしやうと誰も考へやう——美と善が最も露骨に表現されてゐるこの自然との接觸で。

七

私達は二時間以上行軍してゐた。私は身體がぶる／＼するやうな氣がして、眠くなり始めた。同じボンヤリしたものゝが闇のなかにかすかに現はれた。少し距つて同じ動いてゐるところがある黒い壁が。私の直ぐ傍には尾を振り、後足を踏張つて歩んでゐる白い馬の腰部が。黒い袋に入つてゐる小銃と、縫箔のしである皮袋に入つてゐるピストルの白い臺尻がハッキリ見えてゐた白いサアカ

シアの上衣を着た背中が。亞麻色の口鬚と、海狸の襟巻と、柔かい羊皮の手袋をした手を輝かす煙草の光が。

私は眼を閉ぢて、馬の頸に身を屈めてゐた、そして私は數分間眠りつゝけた。すると突然いつものそよぎと蹄の音が私を醒したやうであつた。私は身のまはりを眺めた、そして私に面してゐる黒い壁が私の上に動いて來た間、私はヂツと立つてゐたやうでもあつた。或はその壁がヂツと立つてゐて、私が忽ちそれに突きあたつたやうでもあつた。こんな眼醒の一瞬間に、いよ／＼近づいたやうに思はれるあのわけの分らない不斷のざはめきは、前よりもなほ高く響いた。それは水の響であつた。私達は深い隘路に入つて、その當時その堤に溢れてゐた山の流に近づいてゐた。ざはめきはなほ高くなつた、濕つた草は益々繁つて高くなつた。叢林はなほコンモリとなり、地平線はなほ狭くなつた。此處彼處で、

暗い山をうしろにして、明るい火が輝いてまた忽ち消えた。

「ね、君、何なのだ、あの火は？」私は私の傍に馬を馳つてゐる一人の韃靼人に小聲で訊ねた。

「えッ、知らないんですか？」彼は答へた。

「いや、知らないよ」

「あれは山人が杭に結びつけた藁でさ、火がその周圍に揺れてゐるのです」彼は變則の露西亞語で言つた。

「何のためなのだ？」

「皆が露西亞人の來るのを知るためでさ。いま村ぢやア」彼は笑ひながら附け加へた、「えい、えい、大した騒ぎがあります、彼奴等皆持物を隠し場所に引張り込んでゐるんです」

「何だつて！山の奴等は枝隊が行くのをもう知つてるのか？」私が訊ねた。

「えい、えい、屹度彼奴は知つてるんでさ、彼奴等はいつも知つてます、彼奴等アそんなものでさ」

「シャミルもぢやア戦争の仕度をしてゐるのか」私は訊ねた。

「いやさ」彼は頭を振りながら答へた。「シャミルは戦争に出やうとはしてゐませんや。シャミルは手下の奴等をやつて、彼奴は高い所から眼鏡で眺めてゐるのです」

44

「彼奴は遠くに住んでゐるのか」

「いゝやさ、遠くはありませんや。あの左の方の十露里ばかりのところにあるのです」

「どうしてお前知つてるんだ」私は彼に訊ねた。「お前はあそこに居たことがあ

るのか」

「あります。私達は皆山の中に居たんでさ」

「シャミルを見たことがあるか」

「Pichi」シャミルは見る事が出来やしませんや、百も、三百も、一千も番兵が彼のまはりにはゐるんです。シャミルはその真中にゐまさ」彼は賤しい感嘆の表情を見せて言つた。

なほ清澄になつてゐた空を見上げると、既に東天に光が認められた、七曜星は既に地平線に沈みかけてゐた。併し私達の行軍してゐた隘路は濕つて暗かつた。

45

突然、私達の少し前に、數個の小さな光が閃き始めた。そして同時に彈丸が鋭い音を立て、私達の傍をヒューツと鳴つて過ぎた。私達の四圍の静寂のうち

に、私達は遠く射撃と高い鋭い叫喊を聞いた。それは敵の前哨であつた。前哨を編成してゐた韃靼人は喊聲をつくり、無暗に發砲し、四方へ散開した。

凡てが沈黙に返つた。將軍は通譯を招いた。白いサアカシアの上衣を着た一人の韃靼人が彼のところに馬で馳けつけた、そして、手眞似と低聲で、彼にやや長い間何事か話した。

「ハサノフ中佐、斥候線をもつと散開隊形になほすやうな命令を與へ給へ」將軍は靜かなゆつくりした併し非常に明瞭な聲で言つた。 46

枝隊は川に達してゐた。隘路の眞黒な山は左の後方にあつた。夜は明るくなり始めた。蒼白いかすかな星のやうやく見える空は、なほ高くなつたやうに見えた。曉の赤い光が東天に輝き始めた。冷たい身に泌む風が西方から吹き出した、そして輝やく霧が音を立て、ゝる川の上に蒸氣のやうに湧上つた。

八

案内者が淺瀬を示した。騎兵の前衛と、彼の幕僚と共に將軍が續いた。水は馬の胸の高さに達した、或る所では水面に見えた白い石の間を非常に勢で突進した、そして馬の脚のまはりに逆流の泡立つ渦紋をつくつた。馬は、水の響に驚かされて、頭を擧げ、耳を立てた、併しシツカリと細心に急流にさからつて凹凸の底を進んだ。乗馬者は彼等の足と彼等の小銃を高く擧げた。歩兵は、文字通りに彼等のシャツの他何も身につけないで、小銃とそれに吊るした彼等の軍服と背囊とを水の上に持ち上げた。兵士達は二十列になつて、腕を組んで身を繋いだ。彼等の顔の緊張した表情には、彼等が逆流に抵抗した努力を見ること

が出来た。重砲兵は大きな叫聲を擧げて、彼等の馬を速足で水中に押入れた。大砲と緑色の彈藥車は、時々水をはねかされながら、石の底をゴロ／＼と鳴つた。併し頑強なコサツクの馬は凡て協力して、水を泡に攪き立てながら、尾と鬣を濡らして、他の岸にもがき上つた。

徒渉が済むや將軍の顔は突然或る嚴肅と沈著を示した。彼は馬を廻した、そして騎兵と共に、私達の前に擴がつた森で遮蔽されてゐる廣い林中の空地を速足で過つた。コサツク騎兵斥候が森の縁に沿つて散開した。私達は森のなかにサアカシアの上衣と帽子を身につけた一人の徒歩の兵を認めた、それから第二……そして第三。士官の一人が言つた、「あすこに韃靼人がある」其時そこに一團の煙が木のうしろから上つた……射撃……そしてまた。私達の一齊射撃が敵の射撃の響を消した。たゞ時々蜂の鳴聲のやうな落着いた調子でヒュウ

音を立て、通る彈丸が、凡ての射撃が私達の方のみではなかつたことを示した。其時歩兵が馳足で、そして砲兵が速足で、斥候線を通過した。私達は、大砲の深い低音の調子、投げ出される彈藥筒の金屬質のカチ／＼いふ響、榴彈のシュツ／＼いふ音、小銃のバチ／＼いふ音、を聞いた。歩兵と、騎兵と、そして砲兵が林中の空地の四方に見られた。大砲と榴彈と、そして小銃の煙が森の縁のうちに消散し、霧と交ちつた。ハサノフ中佐は將軍のところまで疾驅し、鋭く彼の馬を止めた。

「閣下」彼は彼の手をサアカシアの帽子まで上げながら言つた、「騎兵に進撃の命令を與へて下さい、彼處に旗があります」そして彼は彼の鞭で馬上の數人の韃靼人を指示した、二人の男が彼等の前に赤と青の檻褸はばを棒の上につけて馬を馳つてゐた。

『よろしい、イワン、ミハイロヴィチ』將軍が言つた。

中佐は直ぐ馬の向を替え、彼の軍刀を空中に振つて叫んだ――

「ウラア！」

「ウラア！ウラア！ウラア！」隊伍のうちで鳴り響いた、そして騎兵が彼の後を飛んだ。

凡ての人が熱心に凝視した。そこには一本の旗があつた、それからまた、第三、そして第四……

敵は攻撃を俟たなかつた。彼等は森の中に消え、そこから砲火を開いた。彈丸はなほ繁く飛んだ。

“ Quel charmant coup d'oeil ! ” 將軍は彼の眞黒な細長い脚の馬の鞍に、軽く英國式に立ち上りながら言つた。

“ Charmant. ” 少佐は彼の r を卷舌で發音しながら答へた、そして鞭で彼の馬

を輕打しながら、將軍のところまで馬を馳つた。 “ C'est un vrai plaisir que la guerre dans un aussi beau pays. ” 彼は言つた。

“ Et surtout en bonne compagnie. ” 溫柔な微笑を見せて將軍がつけ加へた。少佐は敬禮した。

その瞬間、急速な不愉快なシュウといふ音を立て、敵の彈丸の一つが飛び過ぎた、そして何物かに命中した。一人の負傷者の呻吟が後方に聞こえた。この呻吟は繪のやうな戦場の凡ての魅力が、忽ち私にとつて失はれたほど不思議に私を動かした。併し私の他、一見、誰もそれに氣づかなかつた。少佐は前よりも更に大いな興味を見せて笑つてゐるやうに見えた。いま一人の士官は、彼が發言しつつあつた言葉を完全な沈着を以て終つた。將軍は反對の方向を眺めて、最も平靜な微笑を以て何ごとか佛蘭西語で言つた。

「彼等の砲火に答へるやう御命令になりますか？」砲兵指揮官が將軍のところに疾驅しがら訊ねた。

「さうだ、彼奴等を少し威嚇かしてやれ」將軍は煙草に點火しながら無頓着に承認した。

砲列は敷かれ、砲撃は開始した。地はその響で唸つた。不斷の火の閃きがそこにあつた、そして殆んど砲手の動く姿を消した煙が、眼を暗ました。

韃靼人の村は破裂彈を投げつけられた。再びハサノフ中佐が馬を乗りつけた、そして將軍の命令を聞いて村のなかへ突進した。喊聲が再び鳴り響いた、そして騎兵はそれが揚げた塵埃の雲のなかに消えた。

光景は眞に壯大であつた。實戦にたづさはらず、そしてかゝる状態に不慣な私にとつて、一事が印象をきづつけた——動作、興奮、そして叫喊、凡てが私

にとつて過剰であつた。私は斧を揮つて虚空に切りつけてゐる男を思ひ出さな
いわけには行かなかつた。

九

韃靼人の村は私達の軍隊によつて奪はれてゐた。將軍が私もそれに屬してゐた幕僚と共に村に入つたとき、敵の一人もそのなかには残つてゐなかつた。

彼等の平たい泥屋根と繪のやうな煙突を有つた長い清潔な小屋は、凸凹の岩石の上に築かれ、その間を小さい流が流れた。一方には光り輝やく日光によつて照らされ、大きな梨の木と梅の木に充たされた緑の果樹園が在つた。他方には朦朧と見える不思議な影が——墓場の背高い垂直な石と、そして頂上を球と

種々な色の旗で飾られた背高い木の標柱とが。(此等は「勇者」達の墳墓であつた)

軍隊は門の傍に隊次を組んで整列して立つた。一分後に、龍騎兵と、コサツク兵と、歩兵が明かな歡喜を示して、屈曲した横道に散開し、空虚な村は忽ち再び生氣に充ちた。此處には屋根が崩壊されてゐた。私達は戸が破砕されたやうな堅い木にあたる斧の響を聞いた。他の場處では、乾草推が燃えてゐた。塙と小屋は火になつてゐた。そして煙が清澄な空氣のなかに濃厚な雲となつて昇つた。此處には一人のコサツク兵が麥粉の囊と膝掛を曳きづつてゐた。嬉々とした顔の一人の兵士が鐵葉の鍋と或る種の布片を小屋から引張り出してゐた。いま一人が、大聲にクツ／＼鳴きながら塙に向つて羽搏きしてゐた二羽の牝を鷄捕へやうと腕をひろげてゐた。第三が何處かで牛乳の大壘を見出して、それ

から飲んだ、そして高い笑聲を擧げてそれを地上に投げた。

私が一緒にN——要塞から來た大隊もまた村にゐた。大尉は小屋の屋根に腰掛けてゐた。そして私は彼を認めたとき、敵の村にゐるのを忘れて全く家にもゐるやうな氣になつたほど、平氣な様子で短いパイプから *Sambrotalir* 煙草の煙の雲を吹いてゐた。

「あゝ、君もゐるね、やつぱり！」彼は私を見て言つた。

ロオゼンクランツ中尉の高い姿が、村をあとこち疾走した。彼は絶えず命令を叫んでゐた、そして何事かに非常に困つた人の様子をしてゐた。私は彼が勝ち誇つた様子で小屋から出るのを見た。二人の兵士が、手を縛られた一人の老韃靼人を連れて、彼に従つた。裂けた斑染の上衣と、襤褸のズボンをつけた老人は、彼の背に堅く縛られた骨ばつた腕が、彼の肩からもげやうとしてゐるやう

に見えたほど老衰してゐた、そして彼の裸の曲つた脚は辛うじて動くことが出来た。彼の顔は、そして彼の剃つた顔の一部まで、深く皺で窪んでゐたのだ！短く刈つた灰色の鬚髯に取り巻かれた彼の不恰好な齒のない口は、絶えず彼が何か嚙んでゐるやうに動いた。併し彼の赤い、睫毛の無い眼は、なほ熱情の輝きを有ち、老人の生の侮蔑を明かに現はした。

ロオゼンクランツは、通譯を通じて、何故彼が他の者と去らなかつたかを彼に訊ねた。

「私わしが何處へ行くことが出来ましたか？」彼のまほりを落着いて眺めながら彼は言つた。

「他の奴等が行つたところよ」誰かゞ答へた。

「偉えいえ奴は露西亞人と戦ひに行きましたよ、だが俺わしは年老でさ」

「えッ、お前は露西亞人が恐こわくはないのか」

「何を露西亞人が俺わしに爲すべえ！俺は年老でさ」彼はまた言つた、彼の周圍に出来た輪を無頓着に一瞥しながら。

歸途、私はコサツク兵の鞍の後部に揺れながら、彼の腕を縛られた、同じ老人が帽子もなく、同じ平氣な表情で彼のまほりを凝視みつめてゐるのを見た。彼は捕虜の交換に必要であつた。

私は屋根まで攀ち登つて、大尉の傍に身を据えた。

「敵はほんの僅かしかゐなかつたやうだね？」私は今日の出来ごとごとに就いて彼の意見を知り度いと思つて彼に言つた。

「敵だ？」彼は驚いて繰返した。「無論ぢやないか、一人だつてゐやしなかつた。君はこいつ等を敵と呼ぶのか。夜まで待つて、どうして僕等が退却するか見給

へ。君は彼奴等がどうして僕等を家へ送り返すか見るよ。どうして彼奴等が飛び出すかも！」彼はパイプを銜へて、私達が朝通過した矮林を指さしながらつけ加へた。

「何だ、こりやア？」私は、不安になつて、私達から遠くない何かの周囲に出来てゐたドン、コサツクの小さな集團を指さしながら、大尉を遮つて尋ねた。

私達は、彼等の中央に何か子供の泣聲のやうなものを聞いた、そしてその言葉は――

「それを刺すなよ！止せよ……彼の^あ人達が俺達を見るぞ……お前小刀を持つてるか、エヴスチグネイチ？俺達に小刀を寄せよ」

「彼奴等何か分けてやがる、畜生奴が！」大尉が冷静に言つた。
併しその瞬間燃ゆるやうな驚怖した顔をして、愛らしい旗手が角を走り出た、

そして彼の腕を振りながら、コサツク兵に突進した。

「それに觸るな！それを殺すな！」彼は子供らしい聲で喊いた。

士官を見てコサツク兵は退却して、小さな白い小山羊を遁した。若い旗手は全く呆氣にとられた、彼は何事かつぶやいた、そして赤面の表情を以てその前に急に止まつた。

屋根上の大尉と私を見て、彼は前よりなほ顔を赧くした、そして私達の方へ軽快に走つた。

「私は彼奴等が赤子を殺さうとしてゐるのだと思ひました」彼は内氣な微笑を見せて言つた。

將軍は騎兵と共に先方に行つてゐた。私が一緒にN——要塞から来た大隊は後衛を編成した。ロボフ大尉とロオゼンクランツ中尉の中隊は共に退却してゐた。

大尉の豫言は完全に立證された。私達が彼の話した矮林に入るや私達は、道路の兩側に絶えず馬乗と徒歩の山人を認めてゐた。彼等は甚だしく近く來たので、私は彼等の或る者が屈かんで、小銃を手にして、木から木へ走つてゐるのを明かに見ることが出來た。大尉は彼の帽子をとつて敬虔に十字を切つた。年長の兵士の數人が同じことをした。私達は森の中に呼聲と、そして“Lay Giaouri

“Lay, Urusi” の叫喊を聞いた。短い乾いた銃聲が続いて起つた。そして彈丸が兩側からヒュウ／＼音をして飛んで來た。私達の兵士は亂射を以て無言で答へた。たい時々隊伍のうちにこんな叫聲が聞こえた。

「彼奴は何處から發砲してゐるんだ？」森の中で彼奴には申分ないのだ！」
「俺達は火砲を使はなけりやあならねえ」——など。

大砲が戦線に持ち來たされた、そして僅かな射撃の後敵は弱つたやうに見えた。併し一分後に、一步毎に歩兵が進撃した、砲火と叫喊と鯨波は更に間斷なくなつた。

敵の彈丸が私達の頭上で唸り始めたとき、私達は村から六百碼以上は行つてゐなかつた。私はその彈丸の一つで一人の兵士が殺されたのを見た……併し私まで可成それを忘れやうと思つたとき、何故あの怕ろしい光景の詳細を畫さ

なければならぬのか？

ロオゼンクランツ中尉は彼自身の小銃を發射し續けた。彼は一瞬も無言つてゐなかつた、嗚聲で兵士達に喊き、戦線の一端から他へと全速力で疾驅し續けた。彼は幾分蒼白かつた、それが非常に彼の軍人らしい容貌にふさはしかつた。愛らしい騎手は夢中になつてゐた。彼の美しい黒瞳がちの眼は勇氣に輝いた。彼の唇は微かな頰笑を帯びてゐた。彼は絶えず大尉のところに馬を驅つて、森のなかに突進させて呉れと彼の許可を乞ふてゐた。

62

『いまに彼奴等を打ち負かしてやる』彼はキツパリと言つた、『いまに、きつと！』
『そんな必要はない』大尉は簡單に答へた、『僕等は退却しなければならぬ』

大尉の中隊は森の端に位置を取つた。そして伏の姿勢で、彼等の砲火を以て敵を防いだ。大尉は、彼の着古した上衣と、泥に汚れた帽子で、白い馬の手綱

を緩めながら、燈の短いために脚を曲げて無言で跨つた。(兵士達は知つた、そして彼等に指圖を與へる必要がなかつたほどよく彼等の仕事をした) たゞ時々彼は聲を揚げて、頭を擡げた兵士に呼ばはつた。大尉の様子には勇敢な點はなかつた。併しそこには私に異常な印象を與へたほど多くの眞正と單純があつた。『あれが眞の勇氣だ！』之が本能的に私のうちに湧いた考であつた。

彼はまさしく、私がいつも彼を見た通りであつた、同じ落着いた動作、同じ沈着な聲、同じ質素なしかし卒直な顔の正直な表情。たゞ彼の一瞥の異常な注意のなかには彼の前の仕事に靜かに専心してゐる人の熱誠を看出すことが出来た。『いつもと同じ』と言ふことは容易である、しかし如何に多くの相違の色合が見られるか。一人は普通よりなほ沈着に見えるやうに試みる。いま一人はなほ嚴肅に見えるやうに、第三はなほ快活に。併し大尉の顔には、人が何者かに

63

見えやうと、なせしななければならないかを、彼が理解しなかつたことが見られた。

ウオオタルウで、*“La garde meurt, mais ne se rend pas.”* と言つた佛蘭西人と他の英雄達、殊に記憶すべき言葉を残した佛蘭西の英雄は、勇敢であつた、そして彼等の言葉は眞に記憶に値してゐる。併し彼等の勇氣と大尉の勇氣の間にはこの相違があつた——即ち、若し、如何なる場合に於ても、或る偉大な言葉が私の英雄の心霊内で動いたならば、私は彼がそれを發言することを欲しなかつたに違ないと確信する。それは、第一には、偉大な言葉を發言して彼の偉大なる行爲を汚すかも知れないと恐れもしたらうからである、そして第二には、人は彼が偉大なる行動をする力を持つてゐると感ずるとき、如何なる言葉も不必要であるからである。之が、私の考によれば、露西亞魂の獨特な高貴な

特色である。そして、それ故に、如何して、露西亞人は彼が私達の青年士官の間に、舊式の佛蘭西騎兵の模倣を目ざしてゐる陳腐な佛蘭西式の空論を聞くとき、心の苦痛を禁ずることが出来るか。

突然、愛らしい旗手が立つてゐた方に、微かな一齊の「ウラア！」の叫喊が聞かれた。叫喊の方に見入つて、私は約三十の兵士が、彼等の手に小銃を、背に背囊を負ふて、鋤きかへされた畑を越えて一生懸命走つてゐるのを見た。彼等は躓き讀けた、併しなほ押し進んで喊いた。彼等の前には若い旗手が疾驅した、彼の劍を揮ひながら。

彼等は凡て森のなかに消えた。

叫喊と銃火の數分の後、一頭の驚怖した馬が走り出した、そして兵士が死者と傷者を運びながら森の端に現はれた。傷者のなかに青年旗手がゐた。二人の

兵卒が彼を腕で擔いてゐた。彼はハンケチのやうに白かつた、そしてたゞ一瞬前の武勇の自負の極く微かな影が見られた彼の愛らしい小さな頭は、彼の肩の間に恐ろしく沈んで、彼の胸の上にな垂れてどうにか見えた。彼の白いシャツの上に、彼の開いた上衣の下には、小さな赤い點が見られた。

「あゝ、何といふ可哀想なことだ！」私は言つた、本能的にこの憐れな光景から背向きながら。

「ほんとうに非常いことです」彼の小銃に寄りながら濫面をして私の側に立つてゐた一人の老兵が言つた。

「彼の人は何も恐れなかつた。どうして誰があゝすることが出来ませう？」熱心に傷つた青年を眺めながら彼はつけ加へた。「まだ若くて何も知らない——それで彼の人はその酬ひを受けたのだ」

「えゝッ、ではお前は恐ろしいのか」私が訊ねた。
「無論です！」

一一

四人の兵卒が旗手を擔架で運んでゐた。要塞からの一人の兵士が手術用具を入れてゐる二つの緑色の箱を積んだ瘦せ衰へた馬を引いて、彼等に従つた。彼等は軍醫を待つてゐた。士官達は擔荷まで馳けつけて、傷つた若者を勵まし慰めやうと試みた。

「どうだね、アラニン君、またダンスをして騒ぐのも直きだらうよ」ロオゼンクランツ中尉が彼のところまで行つて微笑を見せて言つた。

彼は多分此等の言葉が愛らしい旗手の元氣を引き立てると期待した。併し旗手の冷たい悼ましい顔には、それ等の言葉は希望の結果を生じなかつた。

大尉もまた彼のところに行つた。彼はジツト傷ついた若者を凝視めた、そして彼のいつもの平氣な冷靜な顔は眞卒な同情を見せた。

「アナトオル、イワノヴィチ君」私が彼に豫期したこともなかつた愛情のこもつた深情に充ちた聲で彼は言つた、「神の御心でしたらう」

傷ついた若者は周圍を眺めた。彼の蒼白な顔は悲しい微笑で輝いた。

「さうです、私はあなたの言葉に従はなかつた」

「いや神の御心であつたと仰有い」大尉は繰返した。

「軍醫は到着してゐた。彼は助手から、繃帯と、探針と、他のものを受取つた。そして勵ますやうな微笑を浮べて、彼の袖をまくり上げながら旗手のところま

で行つた。

「さア、丈夫なところへ小穴を一つ開けたやうぢや」彼は無頓着な調子で冗談のやうに言つた、「まア見せ給へ」

旗手は従つた。併し彼が氣輕な軍醫を眺めた表情には、軍醫の氣づかなかつた怪訝と非難があつた。彼は傷を探り、周圍からそれを診べ始めた。併し傷ついた若者は、忍耐を失つて、重い呻吟と共に彼の手を押し除けた。

「放つといて下さい」辛うじて聞かれる聲で彼が言つた。「どうせ私は死にます」

其等の言葉と共に彼は仰のけに倒れた。そして五分後に、私が彼の周圍に立つてゐる團かたまりに近づいて一人の兵士に、旗手はどうかと訊ねた時、彼は私に答へた、「彼の方はおなくなりになります」

枝隊が廣い縦隊に編成されて、歌ひながら、要塞まで行軍したときは日暮であつた。太陽は雪の山の背の後に沈んでゐた、そしてその最後の蔷薇色の光を晴れた清澄な地平線に棚引いたうすい雲に注いでゐた。雪の山は紫の霧で包まれ始めかけてゐた。たゞその最頂の輪廓が日没の赤い光のなかに驚くべく明瞭に浮出した。長い間上つてゐた透明な月は、空の紺碧のなかに白くなり始めてゐた。草と木の縁は黒にかはつて露で濡れてゐた。

軍隊は鬱蒼たる牧場を一齊な足音で黒い塊になつて動いた。小鼓と大鼓と樂しげな歌が四方に聞かれた。第六中隊の歌手は彼の聲の頂上で歌つてゐた、そ

して力と情に充ちてゐる彼の澄んで深い中音の調子は清澄な夕暮の空氣のなかに遠く廣く漂ふた。

草 莓

それは六月であつた、そして天気は熱く静かであつた。森には簇葉が繁つて汗多く緑であつた、そしてたゞ稀に此處彼處で、赤楊と菩提樹から黄い葉が落ちた。野茨の叢は香ばしい花で蔽はれた。森のなかの空地は、蜜の香のする苜蓿の塊であつた。繁つて背高く揺れてゐるライ麥は一層暗くなつて、その穀粒はしきりに脹れてゐた。低地では秧鶏が互に呼ばつた。ライ麥と燕麥の畑では鶉が唳聲を出して喧しく鳴いた。森では極く間を距いて、鶯が鳥渡鳴いてまた

静まつた。熱氣は乾いて炎けてゐた。塵埃は道路に一時厚く敷き、或は、迷つた静かな微風で、今は左に、今は右に吹きやられて、濃い雲となつて舞つた。

百姓は彼等の建物を仕上げるために働き、或は肥料を車で搬んでゐた。餓えた牛は乾いた未耕地に出てゐた、乾草畑に於ける藁草を待ちながら。牝牛と犢は吼いてゐた、そして、彎曲つた尾を擡げて、牧夫から馳け去るために彼等の日蔭の休み場所を見棄てた。路傍と堤の上で、男の子が馬に草を食はしてゐた。女は森から草の囊を搬んでゐた。若い女と小娘は、互に急いで後を追ひながら、樹木が伐り倒された叢林の間を葡つて、夏中田舎へ來てゐた紳士達に賣る草蓐を摘んだ。

此等の裝飾の立派な仰山な建築の別荘の夏間の居住者は、日傘を開いて、派手な清楚な高價な衣服を着て、砂の散つた小路を逍遙した。或は樹木と四阿の

蔭の飾られた卓の傍に座り、熱に壓倒されて茶を飲み或は冷たい飲料を啜つた。塔と廊下と小さな露臺と廻廊のあるニコラス・セミオノヴィチの高莊な（凡てのものが清鮮で清楚な）別荘の前に、六哩離れた町から一人のペテルブルグの紳士を連れて來た三頭立の馬車が立つた。

この紳士は——凡ての委員會の有名な活動的な自由思想家なる——凡ての會議に干與はつた、そして凡ての請願と凡ての上奏——いかにも忠實に見えるやうにうまく工夫されてゐるが、實際非常に急進的な——に署名した。殆んど彼を離れたことなかつた彼の子供時代の親友の遊び仲間^に會ひに、彼は町から來たのであつた（其處では、非常に忙しいので、彼はたゞ二十四時間滞在してゐた）。彼等は彼等の立憲主義を實行する最良手段について、たゞ意見が合はなかつた——そしてそれも極く僅か。ペテルブルグ人はむしろ歐羅巴的であつた——

社會主義的な僅かな傾向さへ有つてゐた——そして彼が従事した種々な地位から非常に多くの俸給を受けてゐた。ニコラス・セミオノヴィチは、之に反して、正教信徒で、幾分親スラヴ主義の純粹な露西亞人であつた、そして數千エイカアの地主であつた。

彼等は食事に五品喫つたのであつた。食事は庭に用意された。併し熱氣で食事するのは殆んど不可能であつた。それで客への食事を用意するために特に骨折つた料理人（一年五十磅貰つた）と、彼の使用人との凡ての仕事は無駄にされた。彼等はたゞ冷やした魚のスウプと、砂糖とビスケットで念入りに飾られた斑色の可愛らしい形の氷菓子を食べたに過ぎなかつた。客の他に、食事には、自由思想家の醫師と、子供等の家庭教師と——恐ろしく社會主義的な革命的な學生（しかしニコラス・セミオノヴィチは彼を程よく制してゆくことが出来た）

——ニコラス・セミオノヴィチの妻マリイと、そして彼等の三人の子供が出席してゐた。子供等の最年少者がたゞ食後の茶菓に行つた。

食事の間そこにはわづかな緊張があつた。それはマリイが非常に神経質な女で、ゴオゴ（豚のよい人達の間の習慣通り、「ゴオゴ」の名は彼等の最年少の息ニコラスに與へられた）の胃の故障を心配してゐたためと、政治問題がまたニコラス・セミオノヴィチと客によつて始められるや、無茶な學生が——彼は誰にでも彼の意見を表白することを恐れないことを示すべき彼の熱誠で——會話に口を入れたためとで。そこで客は談話を止めやうとし、セミオノヴィチは學生を宥めやうとした。

彼等は七時に食事をしてつた。食後友達等は廊下で腰掛けた。そこで彼等は白葡萄酒を混ぜた冷やした炭酸水を啜ひ、話しながら爽かに感じた。

彼等の意見の相違は始め選舉問題に表はれた——直接選出権と委員選出権の
いづれがよいかといふことに就いて。そして討論が熱して來た時彼等は食堂で
茶に呼ばれた。食堂は注意深く網で蠅が防がれてゐた。茶の會話は普通であつ
た、そしてマリイに向けられた。彼女は、彼女の考がゴオゴの消化器の故障の
症状で奪はれてゐたので、それには少しの興味を持つことも出来なかつた。彼
等は書のことを話してゐた、そしてマリイは、デカダン美術には或る *Je ne sais*
quoi がある^やと主張した、それは否定されることは出来なかつた。彼女はその瞬
間、デカダン美術のことは少しも考へてゐなかつた、たゞ彼女が前に能く言つ
たことを繰返してゐたに過ぎなかつた。客の方では少しもそれには無頓着であ
つた、併し彼はデカダンを非難された言葉を聞いた、そして誰も、デカダン、
非デカダンのいづれも少しも彼に關はらなかつたことを了解することが出来な

かつたであらうほど自然にそれを繰返した。そして、ニコラス・セミノヴィ
チは彼の妻を眺めながら、彼女が少し不満足で、ある不愉快は當然であるとも
感じた——そして、そのうえ、彼女の言葉に聞き入るのは非常に退屈であつた。
彼は少くも百回はそれを聞いたに相違ないと考へた。

高價な青銅の洋燈が、部屋のうち^{うち}に點された、そして戶外には提燈が。子供
等は床に入れられてゐた、そしてゴオゴが第一に醫療を受けさせられた。

客は、ニコラス・セミノヴィチと醫者と一緒に、廊下まで出て行つた。馬丁
は硝子の球燈のある臘燭と、もつと余計な炭酸水を持つて來た。そして眞夜中
頃、彼等は漸やく現在の最危機の露西亞に採用さるべき政治の最良の手段につ
いて、實際の活氣ある會話を始めた。彼等は凡て煙草を喫ひ絶えず語つた。

門の外で馬の装具につけた鈴がカチンと鳴つた、馬はまだ食物を與へられて

ゐなかつた。そして老馭者は、馬車のなかに腰掛けて、交る／＼欠伸をし黙をかいた。彼は一人の主人のために二十年働いてきた。そして一月の五留ムウツルに對し、彼の飲んだ三留ムウツルを除いては、彼は凡てその金を彼の兄弟に送つてゐた、兄弟は村で彼等の土地を耕してゐた。雄鶏が別荘から別荘へ互に（殊に非常に高いキイ／＼聲を有つた隣りの構内からの一聲が）鳴き始めたとき、馭者は彼等が自分をおぼれたのかと審かり始めた。それで下りて門の中に行つた。彼は彼の乗客が腰掛けて、食はなべながら談はなしてゐるのを見た。彼は驚いて馬丁を探しに行つた。彼は、彼が仕著を着て、溜たまりに眠つて腰掛けてゐるのを見出した。馭者は彼をおこした。馬丁は、以前は農奴で、彼の給料（それはよい地位であつた。彼は一年の給料二十磅を貰つた、そして時には祝儀としていま十磅を）で、彼の大きな家族を養つた。彼は五人の女の子と二人の男の子を有つてゐた。彼は跳び起き、

一揺りして氣を盛り返した、そして馭者が心配になつて暇が出たのか訊ねてゐると紳士に告げに行つた。

馬丁が入つたとき、討論はその頂上に達してゐた。醫者がまたそれに加はつてゐた。

『私わしには露西亞人が……』客が言つてゐた、「別の方向に發達するのが當然とは思へない。何より先に自由が必要だ——政治上の自由が——その自由が……萬人がよく知つてゐる通り最大の自由だ……他人の權利を侵犯することなしにだ』

彼は自分が少し混亂してゐて、それがそのことを述べるに適した途でないことを感じた。併し彼はそれをどう述ぶべきかを、全然思ひ出すことが出来なかつた。

『その通りだ。』ニコラス・セミオノヴィチは答へた、彼が特に氣に入つた彼自身の考を表白せんと熱望して、客に耳をかさないで——『その通りだ、併しそれは他の手段で達せられなければならない——投票の多数に依つては無いのだ、一般の同意に依つてだ』

『それは否定されるものではない、』醫者が言つた、『スラヴ民族が彼等自身の希望を有つてるといふことだ。例へば波蘭人の否認權を見るが、僕はそれが一層いゝ途だと主張するのではないが……』

82

『鳥渡……私は私が言はうとしてゐたことを言ひきり度いのぢや。』ニコラス・セミオノヴィチが始めた。『露西亞人は特殊な性格を有つてゐる。この性格が……』併しこゝで、イワンが、仕着を着た眠むげな眼の馬丁が、彼を遮つた。『馭者が心配して居ります。』彼が言つた。

『彼あれに言つて呉れないか、』(ペテルブルグの客はいつも丁寧に馬丁に口を利いた。そしてさうするのを誇にした)『私は直ちき行くからつて、そして餘分の時間は拂つてやるからつてね』

『はア、かしこまりました』

馬丁は去つた。そしてニコラス・セミオノヴィチは彼の意見を言ひ盡すことが出来た。併し客と醫者は双方とも二十回もそれを彼が言ふのを聞いたのであつた(それでなければ、兎に角二人はさう考へた)、そしてそれを駁論し始めた。殊に客は、歴史から例を引用した。彼は非常に完全に歴史を知つてゐた。

83

醫者は客に味方した、彼の博識を嘆稱して、彼と知合になつた機會を喜んだ。彼等が彼等の問題に夢中であつた間に、曙光は道路の向側の森のうしろに現はれた。そして鳥は眼醒めた。併し論争者達はなほ煙草を喫つて話をし、話を

しては煙草を喫ひ讀けた。そしてもし下婢が戸口に現はれなかつたならば、會話はなほ長く進んだかも知れなかつた。

この下女は孤兒であつた、彼女は生計を得るために奉公しなければならなかつた。彼女は始め商人の家に行つた、そこで彼の手代の一人が彼女をそゝのかした。彼女は子供を有つた。子供は死んだ、そして彼女は官吏の家に入つた。その息子が——ジムナシウムの學生——少しの落着をも彼女に與へなかつた。それでいま彼女はニコラス・セミオノヴィチ家に女中であつた、彼女は主人の慾望によつて追はれなかつたので自分を幸運だと考へた、それに彼女の給料はキチントと拂つて貰つた。彼女は奥様が、醫者とニコラス・セミオノヴィチに用があると言ひに来た。

「あゝ……」ニコラス・セミオノヴィチは考へた、「ゴオゴが何處か加減が悪

ゝに違ない」

「どうしたんだ？」彼は訊いた。

「ニコラス・ニコライヴィチが御加減が悪いやうです。」ニコラス・ニコライヴィチ——それは小さなゴオゴであつた、彼は食ひ過ぎてゐた、そしていま下痢で苦んでゐた。

「もう疾うに歸つてゐるのだつた。」客は言つた。「まア見給へ、この明るいこと………どんなに長く私達は此處に腰掛けてゐたのだらう！」彼は微笑して、(恰度自分と彼の話相手にさう多くさう長く話してゐたことを示すやうに) 暇を告げた。

イワンは彼の疲れた脚で、客の帽子と洋傘を探しに馳け廻はらなければならなかつた、客はそれ等を最も有りさうもない場所に自分で置いたのであつた。

イワンは心附を貰ふことゝ思つた。併し客は——いつも大まかな全く一留彼にやる積りの——討論に氣をとられて、スツカリ彼を忘れた。そしてたゞ途中に行つて、彼が馬丁に心附をしなかつたことを思ひ出した。

「あゝ、さうだ、」彼は考へた、「今では仕方がない」

馭者は馭者臺に上つて手綱を引き寄せた、そして側の方へ腰掛けながら、馬を鞭つた。鈴がガチャンと鳴つた、そしてペテルブルグの紳士は馬車の柔かい弾力に揺られて、彼の友達の意見の偏狭で充ちてゐた彼の考を追ひやつた。

ニコラス・セミオノヴィチは直ぐ妻のところへ行かないで、彼の友達に就いて同じことを考へてゐた。「此等のペテルブルグ人の淺薄な偏狭は恐ろしい、そして彼等はそれから遁れることが出来ずにゐる。」彼は考へた。彼は妻のところへ行くのを避けた、それはその瞬間、彼は對面から何もよいことを豫想しなかつ

たので。それは皆草莓のためであつた。朝、ニコラス・セミオノヴィチは、値切りもしないで、二三人の百姓の男の子が賣つてゐた餘り熟さない野莓を二皿買つたのであつた。子供達は走つて來て少しねだつた、そして男の子の皿からちかに草莓を食へ始めた。マリイはまだ下に來なかつた。彼女は來て、既に胃に故障があつたゴオゴが草莓を與へられたのを聞いたとき、非常に怒つた。彼女は夫を叱り、彼は彼女を叱つた。そこで彼等は二言三言非常に不愉快な言葉を——殆んど喧嘩を——交はした。

日暮頃少し思はしくない徴候が現はれた、併しニコラス・セミオノヴィチはその後でいまにすつかりよくなると考へた。併しながら醫者が呼ばれたことは、様子が悪くなつてゐたことを示した。

彼が入つたときに、彼は育兒室に氣に入りの派手な色の絹の寢衣を着た彼の

妻を見出した、併しながらそれを彼女はその瞬間氣にしてゐなかつた。そして彼女は、鼻眼鏡を懸け、彼の顔には非常に注意深い表情を示して、細心に診察をしてゐた醫者のために臘の垂れる臙燭を持つてゐた。「左様で御在ます、」彼女は仔細あり氣に言つた。「それはみなあの忌々しい草莓のためで御在ます」

「草莓がどうしたのか？」ニコラス・セミオノヴィチは臙病に訊ねた。

「草莓がどうしたのかですつて？……彼に草莓をおやりになつたのはあなたです、終夜まんぢりともしないで私はかうして居るのです……それに此の子は死にます！」

「いや、どうして、死ぬなんてことがあるものですか。」醫者が微笑を見せて言つた。「まア蒼鉛を少し、それに食物に御注意なすつて……さア少し差し上げて見ませう」

「彼は眠んで居ります。」彼女が言つた。

「あゝ、ではお起ししない方がいゝでせう、明日またお伺ひませう」

「どうぞお願いいたします」

醫者は立ち去つた。そして夫は、妻と一緒にひとり残されて、彼女を長い間宥めることが出来なかつた。彼が熟睡した前に、日は眞晝であつた。

その朝早く、隣の村で男の子達は、彼等が終夜草を食はせた馬を連れて戻つてゐた。彼等の或者は自分達が乗つてゐた一頭だけ有つてゐた。他の者はまたいま一頭の馬を引いてゐた。その間犢と二歳が後ろで自由に走つた。

タラスカ・レゾノフは、十二歳の男の子で、羊皮の上衣を着て、頭には帽子

があるが裸足で、黑白斑の牝馬に腰掛けて、綱で去勢馬を引きながら他の者を皆乗り越して村への小山を急いだ。一頭のよく肥えた黑白斑の犢が走つた、右左にその脚（脚は白い靴下でも穿いてゐるやうに見えた）を蹴上げながら。タラスカは彼の小屋まで馬で乗りつけ、馬を門に繋いで、出入口を入つた。

『おゝい、おゝいつてば……寝すぎしちゃつてるぞ！』彼は彼の妹姉と弟に叫んだ、彼等は出入口の囊布の上に眠つたゐた。

彼等の母もそこに眠つてゐたのだが既に起きて牛の乳を搾つてゐた。

小さなオルガは飛び上つた、両手で彼女の絡れた亞麻色の髪を撫でつけながら。併し彼女の傍に臥てゐたフェドカは羊皮の上衣に彼の頭を隠して臥つてゐた、そしてザラ／＼な小さな踵で外套の下から覗いた恰好のいゝ子供らしい足をこすつた。

前の晩、子供達は草莓摘みに行く手筈であつた、そしてタラスカは馬と返つて来るや姉妹と小さな弟を呼ぶ約束であつた。彼は約束を守つた。夜、草叢の下に座つてゐたので、彼は非常に眠く感じてゐた。併しいま彼はスツカリ眼醒めた、そして少しも臥ないで娘達と草莓摘みに行かうと決めた。彼の母は彼に一杯の牛乳を與へて彼に厚切れのパンを切つた。そこで彼は朝飯を食へに卓の傍の高い腰掛に腰掛けた。それからたゞ股引とシャツをつけて、彼は塵埃のなかに裸の足の痕を残して、道路を急いだ——道路は既に小さな足指の痕跡をハッキリ示してゐる澤山な彼のより小さなのと大きな足跡を見せてゐた。遙か先の森の濃緑をうしろにして、彼は赤と白の斑點のやうに娘達を見ることが出来た。昨夕彼等は草莓を入れる小さな壺と鉢を用意して置いた。そして今朝聖像の前で十字を二度切つた後で、彼等は朝飯なしに、一片のパンさへ携たずに走け出し

た。タラスカは恰度彼等が路を曲つたころ大きな森の近くで彼等に追ひついた。草叢と樹木の低い枝まで露で覆はれてゐた。娘達の小さな裸の足は、彼等が、いまは柔かい草の上を、いまはザラ／＼な土の上を歩むにつれて、始めは冷たくなり、それから火照り始めた。草莓は樹木が伐り倒されてゐたところに主に生長した。娘達は始め樹木が前の年に伐られて若い芽條がたゞ僅か生長し始めてゐた所に行つた。それから汁多い小さな矮林の間の小さな土地へ、薔薇白色の草莓が——時々赤いのを交へて——そのなかに隠れて熟してゐた。小娘達は殆んど二重に屈んで、小さな鳶色の指で一つ一つ莓實を摘んだ、一番悪いのは口のなかに、一番良いのは壺のなかに入れながら。

「ねえオルガ、こゝへ来てご覧！ 此處にそれは澤山あるよ！」

「いやつ！ ほう」彼等は草叢のうしろに行つたとき互に呼んだ。

タラスカはなほ遠く窪地の向うまで行つた、二年前樹木が伐られて、新らしい芽生が、殊に榛や楓が、そこには既に大人より脊高くあつた。草はそこで一層繁つて水つぼく、莓實は、草にまもられて、益々水々しく大きく生長した。

「グルウシヤ！」

「えゝ？」

「狼が来たら？」

「さうね、狼がどうしたの？……何のために人驚かすの？……恐くはなかつてよ、無いことよ！」グルシヤが絶叫した。そしてボンヤリして、とりとめもなく狼のことを考へながら、彼女は後から／＼莓實を——そして非常に立派のなも——鉢のなかへは入れないで彼女の口のなかに入れた。

「ほうら！ タラスカは谷間を越して行つちやつたぢやないかよ！……タラ

スカ、ほう！』

『此處だよう！』タラスカは谷間の向うで答へた。『お前もお出でよう！』

『はアい、行くわよう、あそこにもつと莓實があるんだわよ！』

そして娘達は草叢に摺まりながら、小さな罅隙に沿うて窪地に匍ひ下りた、そしてまた他の側に攀ち上つた。そしてこゝで彼等はすぐ日光の充分な照りつけのなかにある、奇麗な草で蔽はれて草莓のコンモリ撒き散らされた地點にたまくゝゐた。直ぐに彼等は手と口で仕事にかゝつた、無言つて休むことなしに。突然、何物か静寂のなかでざはくゝした、そして恐ろしい音を立て、(彼等にはさう思はれた)、草と矮林の間なかにがさくゝがちやくゝした。

グルウシヤは、既に半分満たされた鉢をひつくりかへしながら、ギョツとして倒れた。『母ちゃん！』彼女はシクゝ云つて泣き出した。

『兎よ！ 兎よ！……タラスカ、兎よ！……そらあすこにあるわよ！』小さなオルガが叫んだ、矮林の間なかに光つた灰褐色の脊中を指さしながら。『どうしたのよ？』彼女はグルウシヤに言つた、そのとき兎は消えて了つてゐた。

『私、狼だと思つたわ。』グルウシヤが答へた、そして彼女の恐怖と絶望の涙は忽ち高い笑聲と變つた。

『馬鹿ねえ！』

『私恐ろしく吃驚したわ。』グルウシヤが言つて鳴り響くやうな笑聲を揚げた。彼等は草莓を摘採つて進んだ。太陽はいま高く上つて、緑の上に明るい斑点と影を投げた。そして到るところで、彼等の腰まで娘達の衣物を染めてゐた露に閃めいた。

娘達は殆んど森の端れに達してゐた、彼等は一層遠く行けば一層澤山草莓が

あることゝ思つて進み進んだので。そしていま後で草莓を摘みに出て来た娘や女達の甲高い聲が四方から鳴り響いた。娘達の壺と鉢は、彼等がアクリナ小母ちやんに出會つたとき、殆んど一杯であつた、彼女もまた草莓採りに来たのであつた。彼女の後に小さな肥つた腹の、帽子もない男の子が、シャツの他何も着ないで、太つた外曲りな脚でよた／＼歩いた。

『さア、彼は私にこびりついてゐるんだ』アクリナ小母ちやんは男の子を腕にとり上げながら、娘達に言つた、『そして私には彼と一緒に残るものが誰もゐないんだよ』

『私達いま兎に嚇かされたのよ。こんな音を立てたのよ……恐ろしい！』

『まア！』アクリナが言つた、そしてまた子供を下へ置いた。こんな言葉を取り交はして、娘達はアクリナから離れて彼等の仕事をつづけた。

『少し休まうぢやないの』小さなオルガが言つた、榛の矮林の蔭に坐りながら。『私疲れちまつた！……あゝ、私達バンを些つとも携つて來なかつたんだもの！ いま少し食べるとおいしいんだわ！』

『私も少し食べたいの、やつぱり』

『アクリナ小母ちやん何を大聲で言つてるんだらう？ 聞こえる？……ねえ、アクリナ小母ちやん！』

『オルガちやん……ええ！』

『なに？』

『私の子供がそこにゐるの？』

『ゐないわよ』

草叢がざ／＼した、そしてアクリナが窪地の向側に現はれた、裳を膝まで

まくり上げて腕に籠を持つて。

「私の子を見なかつた？」

「うむ」

「さア厄介だ……ミシユカ」

「ミシユカ！……」

誰も答へなかつた。

「厄介なことだ！ 迷兒になつちまう……大きな森のなかへ迷つてつちまう」
オルガは跳び上つてグルウシヤと一緒に一方へ彼を探しに行つた、アクリナが別の方へ、絶えず鳴り渡る聲で呼びながら。併し誰も答へなかつた。

「私疲れちやつたわ！」グルウシヤはオルガに後れながら言ひつゞけた。オルガは叫ぶのを止めなかつた、いまは左の方へ、いまは右の方へ行つて左右を眺

めながら。

アクリナの絶望の調子が大きな森の方に遙か離れて聞かれた。オルガはもう搜索を止めやうとしてゐた。そのとき若い芽條のまつはつて茂つてゐる菩提樹の株の傍の汗多い草叢の一つに、彼女は、多分近くに孵り立ての雛を有つてゐて瘻に觸つてゐる鳥の間斷ない怒つた絶望した鳴聲を聞いた。鳥はたしかに驚いて怒つてゐた。オルガは白い花のある背高い草の塊で取り巻かれてゐる草叢のまはりを眺めた、そしてそこに何か青いものを見た——どんな種類の森の木にも似てゐない。彼女は止つてそれを疑視めた。それがミシユカであつた——鳥は彼を恐れて怒つてゐた。

ミシユカは肥つた胃腑を下に臥てゐた、頭を腕にのせて、太つた曲つた小さな脚を伸ばして、心地よげに眠りながら。

オルガは彼の母を呼んだ、子供をおこした、そして彼に彼女の草莓を少しやつた。そしてその後長い間オルガは、どうして彼女がアクリナの子供を探して見つけたかを、彼女の父と母と隣人と、そして彼女が逢ふ凡ての人に告げる慣はしであつた。

太陽は森の上に高くあつた、地球とその上の凡ての物を炎きながら。

「オルガ、来て水をお浴びよ！」彼女が會つた二三人の他の娘が言つた。そして彼等の全群は歌ひながら川へ下りて行つた。水をはね散らしながら、キャツ／＼言ひながら、そして蹴り廻りながら、娘達は、いまは太陽をかくし、いまは現はしして、どんなに黒い低い雲が湧いたか氣づかなかつた。それからどんなに強く花と赤楊の葉が香ひ始めたかも、なほ雷の轟きも。彼等が漸やく着物を着ると、雨が肌まで彼等を濡した。濡れて黒くなり、身にまとひつく着物を

着て、娘達は家に走つた。何か少し食べて、それから畑で馬鈴薯を埋めてゐた父に食事を持つて行つた。

彼等が再び家に返つて食事を済したときは、もう彼等の着物は乾いてゐた。それから彼等は草莓を撰つて、それを鉢に入れ、そしてニコラス・セミオノヅイチの家へ持つて行つた。彼等はそこで大抵よく拂つて貰つた。併し此度草莓は拒絶された。マリイは、暑さで疲れて日傘を開いて大きな安樂椅子に腰掛けてゐたが、娘達を見たとき彼等に向つて扇を振つた、そして言つた――

「いゝえ、いゝえ、少しも要りません！」

併し彼女の最年長の十二歳の息のヴォリアは古典ジムナシウムの彼の苦しい仕事の後、休んで二三の隣人とクロツクをしてゐたが、草莓を見てオルガに馳けつけた。

「いくらするんだい？」

「三十コベック」彼女が言つた。

「それちや多過ぎる」彼は返答した、大人がそのやうに口を利いたので。「鳥渡待つてお呉れ——鳥渡角をお曲り」彼はつけ加へた、そして乳母のところへ走つた。

オルガとグルウシヤは庭にあつた大きな球形の反射鏡裝飾を嘆稱した、小さな家と、森と、庭がそのなかに見えた。この鏡も、多くの他のものと同様に、彼等を驚かさなかつた。それは彼等がこの神秘的な、そして彼等によつて不可解な紳士社界に最も不思議なものを見ると期待したからである。

ヴォリヤは乳母のところへ来て、三十コベック彼に呉れとねだつた。乳母はそれは多過ぎると言つた、彼女は箱から二十コベック引出した。それから、彼

の父（恰度夜の疲勞から起きて、煙草を喫ひ新聞を讀みながら座つてゐた）を避けるために廻り道をして、彼は娘達に二十コベックを與つて、草莓を皿のなかに空にした。

彼等が家に着いたとき、彼女は齒で、二十コベックを縛つて置いた彼女のハシケチの結目を解いた、そしてそれを彼女の母に渡した。母はそれを仕舞つた後、彼女の洗濯物をすゝぎに川へ行つた。

タラスカは馬鈴薯を埋める父の手助けをしてから、繁つた櫛の蔭で熟睡した。彼の父は彼の馬——耕作のために引き出されて、いま隣の土地との境の近くで草を喰んでゐる——に眼をつけながら彼の傍に座つた、馬が燕麥の間か、隣の牧場に迷ひ込むのを氣づかつて。

ニコラス・セミオノヴィチ家では凡てが普段通りになつてゐた。萬事が順調

であつた。三品の食事が用意された、誰も食事に気がすまなかつたので蠅がそれを食べてゐた。

ニコラス・セミオノヴィチは、その朝の新聞の社説で彼の議論の正常なことが證明されたので喜んだ。マリイは、ゴオオの消化が元通りに順當になつたので落着いた。醫者は、薬が利いたので満足した。そしてヴォリアは、草莓を一皿のこらす食べたので喜んだ。

大正六年二月十五日印刷
大正六年二月十八日發行

【定價金參拾錢】

一般 第一
人 第四
叢 奧
書 篇
付

不許複製

譯者 土肥政勝

發行者 東京市麴町區平河町五丁目三十六番地 河本龜之助

印刷者 東京市麴町區隼町二十番地 河本俊三

印刷所 東京市麴町區麴町二丁目九番地 洛陽堂印刷所

發行所

電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

東京市麴町區
洛陽堂

平河町五丁目

トルストイ原著 塚本 弘譯

トルストイ民話集

四六版布製美装箱入
定價壹圓貳拾錢
送料六錢

トルストイ翁に學ぶのに翁の論文や小説からするものは譬へば翁を訪ぬるに玄關からする如きもので、其所に出て來る翁の姿は如何にも嚴正で其の言ふ所は餘りに高遠である、翁の民話から翁の思想人格を覗ふものは譬へば露臺の夕明りの中で茶談に耽る翁に侍する如きもので、不用意の間却つて翁の眞面目を捕ふる事が出來る今や西洋的文明の一轉期に際會し、東洋の偉人トルストイ翁の思想に參ぜんとするものに多きを加ふ、翁のより端的なる一面を知るによき此好著を大方の士人に勧む。譯者は淳朴なる翁の一信者である。

發行所

東京市麴町區平河町五丁目三六
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂

上澤謙二著

耶蘇傳

四六判三百六十頁餘
美装箱入挿畫十枚
定價一圓五十錢
送料八錢

是れ『眞實の耶蘇』にあこがれ渡りし一人が只管此の一道に没頭して得たる所を正直に開陳したるもの。教理の光と傳説の雲深き所に封じられたんとする『彼』を、血と涙と努力の現實の世界に取戻さんとしたるもの也。著者年齒未だ若く、其立場は極めて自由にして、何等妥協を知らず、束縛に累せられず、直に耶蘇の心胸に迫りて其真相を闡揚し來る。

全篇悉く是れ敬虔と大膽の奇異なる交錯、冷頭と熱腸のいみじき結合なり。眞實の耶蘇を求むる現代の人々に一脈の共鳴、一個の解決を與ふるものあるを信じて疑はざる也。

東京帝國大學 醫學博士永井潜先生著

(五版出來)

改 版
增 補
内 容 一 新

生 命 論

菊判六百頁餘挿畫四十
九枚純白布製天金箱入
價參圓八拾錢稅拾六錢

生命に關する思想變遷の歷程を釋ね。最新自然科學の見地より生活現象に向ひて明晰なる解釋を下し、殊に實驗遺傳學說の如きは叙說の巧妙さながら掌を指すが如く、而して之に附するに、生命人造論として世界に喧傳せしシエフアー氏論文を以てし、錦上花を添ふるの感あらしめし生命論は今や版を新たにするに當りて、更に幾朶の花を加へたり。曰く膠質化學と生活現象曰く原素の循環と空中窒素の利用曰く營養の真相と食物の人造曰く觸媒作用と酸酵素就中防禦酸酵素と妊孕及び病の血清診斷の如き人間に於ける遺傳と人種改善學の如き、一は醫學界に於ける一新生面を開拓して近世學壇の耳目を驚かし、一は永遠の福祉を人生に齎すべき一大使命を帯びて新たな活動を始め、天下經世有識の士をして齊しく思を致さしむるもの、斯くて六百頁餘の尪然たる大冊子一度巻を繰れば讀了せずんば止まざらしむ。尙序文に於て著者は『生命論』反駁者を反駁し、且つ終に詳細なる索引を附せり。

發行所

東京市麴町區平河町五丁目卅六番地
振替貯金口座番號東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町
四二五八

東京帝國大學 醫學博士 永井潜先生新著

再版
發賣

生物學と哲學との境

菊判七百頁純白
布製天金美裝箱入
金價參圓八拾錢
送料金拾六錢

科學の嶺と、哲學の峰と、聳え峙つ其の間の深い谷底に、碧の如き生命の泉が湛えて居る。其處に『物』と『心』が神秘の影を映して居る。『人』と『自然』が樂しき踊を舞て居る『主觀』と『客觀』が温き握手をして、最も崇く最も大なる天啓に耳を傾けて居る。而かも科學の嶺に得々たるものも、哲學の峰に超然たるものも、到底此の天地の大觀に接することは出来ぬ。之れに接することの出来るのは、嶺より峰に向ふ聖智の人、峰より嶺に進む圓覺の士でなければならぬ。曩に『生命論』を公にして、洛陽の紙價を貴かゝらしめ『醫學と哲學』を出して、斯界を驚嘆せしめたる著者は今此の大觀を捉げ來りて讀者に説明せんと努力して居る或は生命研究の眞諦を論じ或は知識生活の第一歩を説き、或は心身の影響を叙し或は兩性相關の妙趣を述べ或は自然死の研究に入る。材は人を得て其光彩を放ち、人は材を待て其妙腕を揮つて居る。思を自然と人生とに馳せつゝある天下有識の士は、此の書を繰いて必ずや莞爾たる者あらう。

發行所

東京市麴町區平河町五丁目
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町
四二五八

畔上賢造著

悲哀より歡喜まで

四六判布製箱入

定價 九十錢

送料 八錢

これ著者が信仰の告白である。十二年間の心靈的實驗を記せるものである。著者少にして哀愁の囚ふる處となりてより眞理と光明の探究に從て科學、文藝、哲學等に於て之を發見する能はず、かの盛なる近代思想も著者を救はず、舊き基督教にも新しき基督教にも満足せず、遂に自らキリストの生命を採りて、其救済を實驗し以て歡喜法悅の境に入つた。此の生きたる實驗を語れるものが本書である。惱める人に基督の救済を示して心靈の飢渴を醫し根本的の安心を與へんとは著者の願である。

トルストイ原著 加藤一夫譯 (再版)

我等何を爲すべき乎

四六判六百頁餘

タロース製函入

定價 一圓六十錢

送料 十二錢

若し『我懺悔』がトルストイが永遠的生命の苦悶と憧憬であるならば『吾等何を爲すべき乎』は彼の人類的生命の良心的苦悶と其の解脱とである。トルストイの偉大は單にその文學的表現の上に於て、も古今獨歩であるが、更に偉大にして更に深刻なる彼の價値は、その永遠的及人類苦悶と憧憬との中に於ける彼の不可抗の促進力でなければならぬ。何人か彼の深甚なる苦悶の叫びや喘ぎの聲に敬虔の至情と靈感の涙なくして對し得よう。『我懺悔』に於ては巢より落されし雛鳥の悲しみである。『吾等何を爲すべき乎』に於ては誤れる自己の生活の眞狀を見せつけられた驚愕と雄々しい自己革命の大願發起である。寔にこれ萬人の書にして人類最高の福音たり蓋し惱める現代に對する唯一最高の贈物たる可きを信ず。

トルストイ著 加藤一夫譯

我等何を信すべき乎

四六判五百頁餘
布製函入
定價一圓五十錢
送料十二錢

自分は此譯を出さざるを得なかつた故に出すのである。曩きに「我等何を爲すべき乎」を讀んだ讀者はトルストイをして斯る思想や生活に到達するに至つた其根源を知らねばならぬやうである、げに我等何を爲すべき乎に表はれたるトルストイの偉大は彼が此書に於て表白したるが如き、誠實深刻なる彼の宗教彼の信仰によるのであつて、こは實にトルストイをして偉大たらしめた最初の力である。收むる所「我宗教」及び「宗教とは何ぞや」の二書にして一つは彼の宗教を知るに足り他は彼の宗教觀を窺ふに足る、トルストイの力と人格と偉大とを酌まんと思ふものは先づ此の書に來らねばならぬ、基督者は其一切の被せ物を除かれたる眞基督教を知り其他の者は眞宗教を得るであらう。

海老名彈正序 帆足理一郎著(再版)

宗教と人生

四六判 五百頁
布製箱入
定價一圓卅錢
送料八錢

古き宗教は廢れ、古き藝術は毀たれ、古き哲學は破産して今や道義の根柢危機に瀕せり。社會は尙階級の傳習に囚はれ、少數は多數を壓倒し、個人は徒に個我の權威を絶叫して赤裸々の野獸性を暴露し過てる自然主義、本能主義、生命主義に青年の心血を腐らし、刹那的感衝的朝三暮四の生涯を以て自己創造と誇稱し、自我實現と迷想し、而も精神生活の貧弱寂寞訴ふるに由なからんとす。著者は多年シカゴ大學大学院に宗教哲學を専攻し同大學神學科長マシュー博士より「大秀才」と稱せらる。多年人生の波瀾に處して内的奮闘の生活に血と涙の谷を潜りし著者か其清新なる思想の綠光と敬虔なる信仰の白熱とは相俟つて讀者の心胸に一味の靈光の閃きを傳へん。

露國ソロウイヨフ原著 關竹三郎譯

神 人 論

四六判三百頁餘
布製箱入
定價一圓二十錢
送料八錢

本書の原著者は露國近代隨一の哲學者にして、トルストイと並び立てられたる露國思想界の二大柱なり。彼の哲學は深く宇宙實在の根本義に觸れ、本源的生命の實相と其の表象とを語ることに於て遙にオイケン、ベルグソンに勝るものあり、今や全歐洲に認められ、彼の深遠なる哲學は枯渴せる心靈に蘇生の力を與へつゝあり、譯者は熱心なるソロウイヨフの研究家、譯文は明快透徹正に之れ最近本邦思想界最大の收穫たらん。

醫學博士
文學博士 富士川游著

金 剛 心

四六判全一冊
定價五 十錢
送料 四 錢

迷ふて行く所を知らざる凡夫に對して、眞實悲願の方向を示す。著者僧侶ならざるが故に、説く所却て因襲相承の弊を離れ欣求歸命の眞意を語り得るの便あり、淨土眞宗の安心の要訣を明にし、眞實に生きんと欲する人の宜しく一讀すべき書なり。

(容 内)

- 無佛無法○機の深信○佛と凡夫○業種と因縁○彌陀の誓願
- 安樂淨土○無碍光佛○慈悲の親○攝取不捨○一心歸命○如來の慈悲○佛凡一體○生佛不離○報恩謝德○現世の利益●附錄○淨土眞宗○四法建立○願力廻向○阿彌陀佛○六字名號○一心歸命○即得往生○淨土往生○報恩行業

醫學博士 永井潜序 兒玉昌著(再版)

滅び行く宇宙及人類

四六四頁 五十頁
布製箱入
アート紙挿畫廿枚入
定價 一圓四十錢
送料 八錢

萬物は日夜流れて愁人の爲めに暫くも止まらず、流れに浮ぶ泡沫は且つ消え且つ結びて將に何れに歸せんとはする。宗教迷多くして此の疑を解く能はず、哲學光薄くして未だ此の真相を穿ち得ず。著者思を茲に潜むる事多年、今や一點螢火の如き科學の灯を掲げて此萬有の流れの末を探らんとす。上は日月星辰より下はアメーバ體內の現象に及び、全篇を貫くに勢力分散の原理に基づく佛教の寂滅思想を以てす。世の惱める者、迷へる者、冀くは本書に依つて始めて宇宙の目的人生の歸趣を明にするを得んか。

579
579

579



終